

史 跡

上之國勝山館跡 VII

—昭和60年度発掘調査整備事業概報—



1986・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 VII

—昭和60年度発掘調査整備事業概報—

序

国指定史跡上ノ国勝山館跡の環境整備事業は昭和54年以来本年度で7か年を経過することになりました。

この間遺構確認調査により各種建物跡、空壕、柵列、墓所等、またこれに伴う豊富な遺物の発掘ができたところではありますが昭和60年度においては空壕を渡る橋の存在、館の中央の通路そしてその左右に地割りがなされた建物が数次に亘って建てられたことなどが判明しました。

さらに久しく期待されてきました本格的な整備が開始され土塁、柵列の復元、室町・江戸両時期の館神八幡宮跡にかかわる遺構の表示、説明板等の設置により勝山館の往時の姿の一端を回顧できることとなったと思うところでございます。

今後の上ノ国中世史跡公園計画の着実な前進をねがい勝山館跡の環境整備事業の継続推進にさらに決意を固くする次第でございます。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

昭和61年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 布 施 潤 一 郎

本文目次

序

本文目次/挿図目次

例言/引用参考文献

I 調査概要	1
1 調査	1
2 基本層序	1
3 保存処理	3
4 環境整備	3
II 遺構確認調査	3
1 門跡・横柱跡	3
2 第9号地割面の調査	8
3 第10号地割面の調査	28
4 第8号地割面西端の調査	37
5 第1～第10号地割面の概要	44
III まとめ	55
IV 保存処理	58
V 環境整備工事	60
VI 結び	64

挿図目次

第1図 調査位置図	2
第2図 空壕跡土層堆積図	4
第3図 空壕跡出土遺物(陶磁器)	6
第4図 9号地割面建物跡想定図	10
第5図 9号地割面建物跡想定図	11
第6図 9号地割面焼土平面・断面図	13
第7図 集石・炭化物堆積遺構図	14
第8図 9号地割面土壌平面・断面図	16
第9図 9号地割面32号竪穴遺構平面・断面図	17
第10図 9号地割面23号竪穴遺構平面・断面図	18
第11図 9号地割面出土磁器・舶載品(青磁・白磁)	20
第12図 9号地割面出土磁器・舶載品(染付・赤絵)	21

第13図 9号地割面出土陶器・国産品(美濃灰釉・唐津)	22
第14図 9号地割面出土鉄製品	24
第15図 9号地割面出土鉄製品及び骨角器	25
第16図 9号地割面鉄製品出土分布図	26
第17図 10号地割面柱穴配置図	29
第18図 10号地割面建物跡想定図	31
第19図 10号地割面建物跡想定図	32
第20図 10号地割面出土陶器	33
第21図 10号地割面出土鉄製品	34
第22図 10号地割面鉄製品出土分布図	35
第23図 8号地割面西端柱穴配置図	39
第24図 8号地割面出土陶磁器	41
第25図 8号地割面出土鉄製品及び鉄製品出土分布図	42
第26図 磁器(青磁・白磁・染付)	45
第27図 磁器(染付)	46
第28図 陶器(美濃)	48
第29図 陶器(美濃・唐津・楽)	49
第30図 鉄製品	51
第31図 鉄製品	52
第32図 鉄製品	53
第33図 鉄製品	54
第34図 木製品保存処理グラフ	59
第35図 木製品保存処理グラフ	60
第36図 説明板詳細・欄列復原正・側面図	62
第37図 礎石建物跡・掘立柱建物跡表示詳細	63

表目次

表1 焼土・炭化物等成分抽出表	56
表2 出土陶磁器集計表	57

写真図版目次

PL.1 館神八幡宮跡整備状況(東より)	
PL.2 整備状況(欄列の整備・館神八幡宮跡)	

- P L. 3 整備状況(掘立柱建物跡)
 P L. 4 調査状況(門・橋柱跡・9・
 10号地剖面)
 P L. 5 出土陶磁器(1)
 P L. 6 出土陶磁器(2)
 P L. 7 出土陶磁器(3)
 P L. 8 出土陶磁器(4)
 P L. 9 勝山館跡遠景
 P L. 10 整備状況
 P L. 11 整備状況
 P L. 12 整備状況
 P L. 13 整備状況
 P L. 14 門・橋柱跡調査土層断面
 P L. 15 門柱跡
 P L. 16 門・橋柱跡調査
 P L. 17 橋柱跡調査
 P L. 18 橋柱跡調査
 P L. 19 門・橋柱跡調査終了
 P L. 20 空壕跡(橋柱跡調査区)出土遺物
 P L. 21 第9号地剖面(南より)
 P L. 22 第9号地剖面
 P L. 23 第9号地剖面
 P L. 24 第9号地剖面
 P L. 25 第9号地剖面土層断面
 P L. 26 第9号地剖面遺構(32号竪穴)
 P L. 27 第9号地剖面遺構(23号竪穴)
 P L. 28 第9号地剖面集石遺構池
 P L. 29 第9号地剖面出土遺物(焼土1)
 P L. 30 第9号地剖面出土遺物
 P L. 31 第9号地剖面出土遺物(焼土8)
 P L. 32 第9号地剖面出土遺物
 (炭化物集積1)
 P L. 33 第9号地剖面出土遺物
 (炭化物集積2)
 P L. 34 第9号地剖面出土遺物
 (炭化物集積2)
 P L. 35 第9号地剖面出土遺物
 (炭化物集積3)
 P L. 36 第9号地剖面出土遺物
 (炭化物集積5)
 P L. 37 第9号地剖面出土遺物
 P L. 38 第9号地剖面出土陶磁器
 P L. 39 第9号地剖面出土磁器(青磁)
 P L. 40 第9号地剖面出土磁器
 (白磁・赤絵)
 P L. 41 第9号地剖面出土磁器(染付)
 P L. 42 第9号地剖面出土磁器(染付)
 P L. 43 第9号地剖面出土陶器(美濃)
 P L. 44 第9号地剖面出土陶器(美濃・唐津)
 P L. 45 第9号地剖面出土陶器(播鉢)
 P L. 46 第9号地剖面出土鉄製品
 P L. 47 第9号地剖面出土遺物
 P L. 48 第10号地剖面(南から)
 P L. 49 第10号地剖面出土磁器
 (青磁・白磁・染付)
 P L. 50 第10号地剖面出土陶器
 (美濃・唐津)
 P L. 51 第10号地剖面出土陶器・鉄製品
 P L. 52 第8号地剖面西端
 P L. 53 第8号地剖面西端
 P L. 54 第8号地剖面西端出土陶磁器
 P L. 55 第8号地剖面西端出土鉄製品・
 焼土1・遺物
 P L. 56 第8号地剖面西端焼土1・遺物
 P L. 57 第8号地剖面西端焼土1・遺物
 P L. 58 第8号地剖面西端炭化物層・遺物
 P L. 59 第1~10号地剖面出土磁器
 (青磁・白磁・赤絵)
 P L. 60 第1~10号地剖面出土磁器(染付)
 P L. 61 第1~10号地剖面出土陶器
 P L. 62 第1~10号地剖面出土陶器
 P L. 63 第1~8号地剖面出土鉄製品①
 P L. 64 第1~8号地剖面出土鉄製品②

附図目次

附図1 遺構配置図

附図2 門跡・橋柱跡遺構図

附図3 第9号地剖面遺構図

例 言

1. 本書は史跡上之國勝山館跡の昭和60年度発掘調査及び環境整備工事について概要をまとめたものである。環境整備工事並びに遺構調査については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生・文化学院・鈴木直先生から御指導をいただいた。
2. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 布施潤一郎
主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 関登志夫
修景技術専門員 山崎重任(上ノ国町建設課長)
発掘担当者 学芸員 崎崎水穂
調査員 学芸員 斉藤邦典
3. 本書はⅠ、Ⅲを斉藤、Ⅳを崎崎が執筆し、Ⅱは両名が分担し、それぞれ文末に文責を示した。尚Ⅳは環境整備工事設計施工管理を委託した柳田・石塚建築設計事務所へ依頼した。
4. 挿図作成は執筆者が主に行い作業員が補助した。
5. 挿図の中で示した北方位は真北を示す。
6. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。(順不同)

文化庁記念物課 仲野浩、牛川幸幸、加藤彦彦、河原純之、外間伊隆 北海道教育庁文化課 中野慎吾、森田知忠、桜庭勝己、鎌田幸彦 東京大学名誉教授 三上次男 北海道大学 足達富士夫文化学院 鈴木直 埼玉大学 荒木伸介

千葉大学 玉井哲雄 奈良国立文化財研究所 沢田正昭 東洋文庫 渡辺兼康 佐藤忠雄 長崎県教育庁文化課 高野晋司、副島和明、宮崎貴夫 佐賀県教育庁文化課 松尾法博、森田孝志、徳富剛久 佐賀県伊万里市教育委員会 盛峰雄 青森県八戸市教育委員会 佐々木浩一 青森県浪岡町教育委員会 工藤清泰 韓国国立慶州博物館 金弘柱 佐賀県立陶磁文化館 大橋康二 北海道開拓記念館 三野紀雄、小林幸雄 日本習字連盟 石原涉 愛知県埋蔵文化財センター 小澤一弘 北海道埋蔵文化財センター 中村福彦、畑宏明 鬼柳彰、大沼忠春、佐藤和雄、長沼孝、三浦正人、田中哲郎 松前町教育委員会 久保泰 乙部町教育委員会 森広樹 作業員

長内陽子 木村洋子 工藤恵美子 辻美保子 浜田克子 平井登美子 布施幸美 山崎洋子

引用参考文献

和漢三才図会 寺島良安 1712年(1983年)
中世住居址 伊藤鄭爾 1958年
日本の美術8「仏具」 蔵田巖 1967年
日本の美術2「茶道具」 藤岡了一 1968年
新版考古学講座第7巻有历史文化(下) 1969年
標準色彩図表A 日本色彩研究所 1970年
標準土色帖 農林省 1970年
日本の美術5「民家」 吉田靖 1971年
原色陶器大辞典 1972年
大工道具の歴史(岩波新書) 村松貞次郎 1973年
日本人とすまい(岩波新書) 上田篤 1974年
文化財講座 日本の建築1~4 1975年~1976年
文化財講座 日本の美術13 1977年
世界陶磁全集3 1977年
貝塚21 物質文化研究会 1978年
朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ 福井県教育委員会 1979年

日本先史土器の縄文 山内清男 1979年
縄文文化の終末年代 菊池徹夫 古代探叢 滝口宏古希記念考古学論集 1979年
美沢川遺跡群出土赤色漆塗櫛の製作技法について 小林幸雄 三野紀雄 北海道開拓記念館研究年報第7号 北海道開拓記念館 1979年
木製考古遺物の保存処理法(1)-(2) 北海道開拓記念館研究年報8・10号 北海道開拓記念館 1980年、1982年
15・16世紀における日本出土の青花磁に関する編年試案1) 大橋康二 白水No8 白水会 1981年
日本の美術12「室町建築」 川上貢 1982年
貿易陶磁研究No2 日本貿易陶磁研究会 1982年
北海道の鉄鍋について 越田賢一郎 物質文化42 物質文化研究会 1984年
浪岡城跡Ⅳ 浪岡町教育委員会 1985年
上之國勝山館跡Ⅰ~Ⅵ 上ノ国町教育委員会 1980年~1985年

I 調査概要

1. 調査

本年度調査対象地区は館神八幡宮跡東側23J区及び同北側23L区、23K区と空壕地区25J、26J区であり調査実施面積は約480m²である。調査目的は23J区、23K区での建物跡の検出、23L区は23K区より南側1段上の地割面に引き続き未調査部分での遺構検出、空壕地区25J、26J区では旧道跡の検出である。調査期間は5月27日より10月15日までである。

5月 23L区表土剥ぎ。遺構確認調査。25J区～26J区2m幅のトレンチ設定。

6月 25J区旧道跡検出。同実測、写真撮影。25J区～26J区セクション図作成。26J区での柱穴検出により周囲に柱穴群の存在が予想されたためトレンチを西側に拡幅。

7月 25J区～26J区柱穴群検出。同実測、写真撮影、埋め戻し。

23J区人工林の伐採、根こし。

23K9区～10区、23J6区～7区、23K14区～15区、23J11区～12区、23K19区～20区、23J16区～17区表土剥ぎ、23J8区、13区、18区58年度調査トレンチ内での同区南北セクション再確認。23K9区～10区、23J6区、23K14区～15区、23J11区、23K19区～20区、23J16区精査。

柱穴群覆土観察及び柱穴配置略図作成。同調査。23号竪穴セクション図作成。同調査。

8月 23J6区、11区、16区南北セクション図作成。23J8区～9区、23J13区～14区、23J18区～19区表土剥ぎ。

23J7区～9区精査。柱穴群覆土観察。同配置略図作成。同地区北側地割段調査。

23J12区～14区精査。23J9区、14区集石及び炭化物集積箇所調査。32号竪穴遺構調査。焼土、土壌セクション図作成。

23J17区～19区精査。柱穴配置略図作成。同調査。

9月 23J9区、13区、14区整地面除去。Ⅳ層上面にて精査。同調査。

23J区内地割溝内の小ピット掘り下げ。

23J区写真撮影。同地区実測。

23L区5月に引き続き調査再開。

23L15区、20区南北セクション図作成。同地区調査。

10月 23J区、23K区、23L区埋め戻し。終了。

調査方法は23J区、23K区、23L区は従来通り20m×20m大グリッドを基準杭として4m×4mの小グリッドを設定し作業を進めた。表土、Ⅱ層除去後Ⅲ層上面で柱穴その他の遺構を検出する目的で精査を進めたが整地層であることより遺構確認が明確になし得なく不明な箇所はⅣ層まで掘り下げ確認した。その後柱穴間の重複、覆土の状態等を観察しながら柱穴配置略図を作成し柱穴を掘り下げていった。土壌・焼土は半載しセクション図作成後掘り下げた。25J・26J区は空壕地区の御代参道路を館神八幡宮跡南側土塁附近より南北に半載する形で2m幅のトレンチを空壕B横断箇所まで設定し掘り進めた。その後柱穴検出に伴ない周囲に柱穴群の存在が予想されたためセクション図作成後当トレンチを東西に拡幅していった。遺物の取り上げは23J区、23K区、23L区ではⅠ、Ⅱ層は4m×4mのグリッドを4等分した2m×2m毎の一括取り上げ、Ⅲ層以下は実測図作成後レベルを附し取り上げた。25J、26J区は4m×4mのグリッドを設定しないで行ったため、20m×20mの大グリッドを基準として任意に平板点を設定しⅠ層を除きすべて実測しレベルを附して取り上げた。尚各地割面の名称については館神八幡宮跡南門跡西側の土塁付近を1号、東側を2号、3号は館神八幡宮跡、4号は館神八幡宮跡東側の現御代参道路を狭んだ平坦面とし以後の建物跡平坦面については現御代参道路西側、東側を交互に4号地割面、5号地割面と番号を附していった。

2. 基本層序

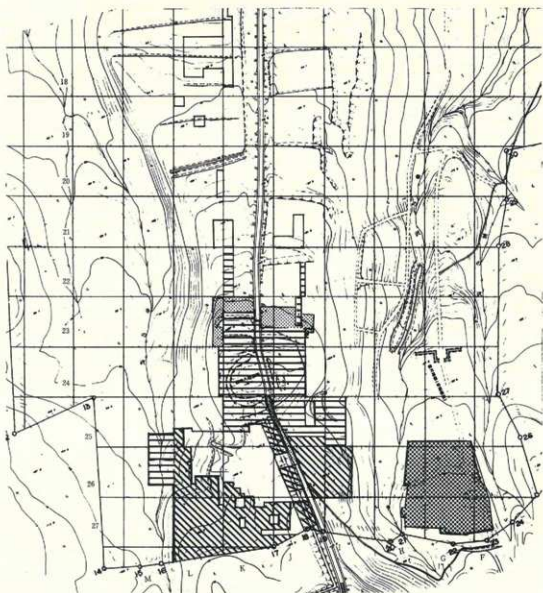
本年度調査区の層序は以下のとおりである。






Ⅰ層 表土層 10YR 4/4 褐色～10YR 3/3 暗褐色、2.5Y 4/4 褐色～2.5Y 4/3 オリーブ褐色等を呈す。腐植はあまり発達していない。

Ⅱ層 館廃絶後の自然堆積層。10YR 5/4～10YR 4/3 にぶい黄褐色を呈する。炭化物、Os-a含有。細分され、10YR 8/3 淡黄褐色～5YR 8/3 淡褐色OS-a純層が含まれる。

Ⅲ層 館機能時の整地盛土層。10YR 5/6 黄褐色～2.5Y 4/3 オリーブ褐色を呈する。炭化物、ロームブロック等多量に含有する。細分される。

ⅢC層 空壕A、空壕B覆土。5Y 5/2～5/3



-  54・55年度調査区
-  56年度調査区
-  57・58年度調査区
-  59年度調査区
-  60年度調査区



0 50m

～4/2 灰オリーブ色。5Y4/3 暗オリーブ色を呈する。基盤質微小礫層である。

IV層 縄文期から館が機能する直前までの自然堆積層であり細分される。¹²IVa層 10YR1.7/1 黒色を呈し縄文以後より館が機能する直前までの自然堆積層である。IVC層 10YR6/8 明黄褐色を呈する。縄文期包含層である。V層、ソフトローム。VI層 ハードローム。

3. 保存処理

昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡より出土した鉄製品、木製品の処理を行なっている。今

年度は80点の木製品のPEG含浸処理、400点の鉄製品の合成樹脂圧注含浸処理、20点の漆器の合成樹脂含浸処理を行なった。

4. 環境整備

今年度は1号、2号地割面上土塁上の木柵列地上復元、3号地割面の中世及び江戸時代の神社跡表示、6号地割面の掘立柱建物跡表示を行なった。

註 昨年度概報第一編Ⅱ章層序の項にて本層を建物跡柱穴掘り込み面としたが建物跡柱穴確認面に訂正したい(斉藤)。

Ⅱ 遺構確認調査

1. 門跡、橋柱跡

(1) 調査の目的

本事業開始の初年、昭和54年、館後方部で空壕跡の確認調査を行なった。この時空壕の内側に土塁の形成を知るべく通路に面した切り通しで断面観察を行った。精査の結果岩盤を掘り込んだ径70cm程の大きな掘り方と柱痕跡を検出し、位置、規模等から、門或いは壕をわたる橋等の施設が存在が予測されていた。

昭和59年度に整備実施計画書の策定を見、60年度に土塁上に木柵列の地上復元整備を行うところとなったが、通路となっている部分については、館形成時からこの通路が使用されていたのか、その場合の通敷方法の有無等の細部を決定し難い状況であった。この通路は昭和46年自然研究路として整備されたものではあるが、元来は「御代参道路」、「参道」などと地元で呼ばれていて江戸時代、毎年1月松前藩主に代って、家臣が、館神八幡宮や夷王山神社に参拝を命じられ、歩みを進めた道でもあった。

この為、先に検出した柱穴の性格を明らかにする事も含め、周辺部の遺構確認調査を実施するところとなった。(松崎)

(2) 層序 SPO～O'、SPO'～O'' (第2図)

当セクションで見える限り既に判明している空壕Bと空壕Aの新旧関係は出てこないが概要を以下に述べる。まず空壕Bが形成され、やがて空壕B両斜面よりⅢC層の堆積が始まる。やや堆積が進んだ頃にⅢC層を掘りこみ面とした柱穴が掘りこまれる。(図上72、73、74)セクション図上では見られないが平面図(附図2)に見られるように

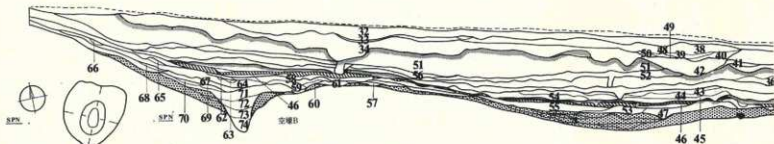
空壕B～空壕Aに至るまで多数の柱穴が確認されているが、空壕B地区の柱穴はすべてⅢC層を掘りこみ面とし、空壕A地区ではすべて基盤を掘りこみ面としている。空壕B地区と空壕A地区の柱穴はほぼ線上に並び両地区の柱穴の新旧関係は考えられずほぼ同時期である。これらのことより柱穴群は空壕Bが埋没し、空壕Aが機能した時期のもので空壕Aに附属する施設と考えられる。その後空壕AではⅢC層、次に空壕B58～71、空壕A29～31の灰褐色～褐色系の砂礫粒を多量に含んだやや堅微な層が堆積する。これらはⅢC層から砂粒を含まないⅠ、Ⅱ層との間の漸移層と考えられる。その後空壕A、図上右端縦線スクリーン部分18・19の一方に肩をもち中央にフラットな面をもつ旧道が作られる。構成する土層は暗褐色～黒褐色を呈し極めて腐植に富んでいる。次にⅡ層(図上46)、Os-a純層(図上斜線スクリーン部分)が堆積する。その後現代参道路の面までに空壕Aでは11.9.7.5.3の褐色～暗褐色のやや腐植した層が12.10.8.6の堅微な明褐色の砂粒混合層と交互に堆積し現在に至っている。尚現代の御代参道路は旧地表面の上に盛土をし作られている。(斉藤)

(3) 検出遺構

a 門跡 54年度断面観察で検出していた柱穴は100×90cm程の円形の掘り方を存し、約40(一端は54年の調査で消滅している。)×30cmの長方形の柱痕跡が認められた。痕跡中には1741年度島大島噴出の白色火山灰(Os-a)が流入している。掘り方は青緑色の砂岩質基盤を掘り込んでいて途中に一段を有している。掘りかえされている事も

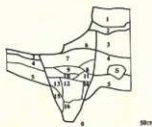
SPO
SPO

SPO 1:10,000



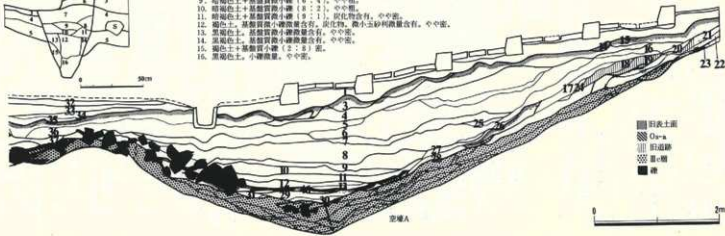
SPO 1:100,000

SPO



1. 暗褐色土+基盤質微小礫 (9:1), 中粗。
2. 暗褐色土+基盤質微小礫 (6:4), 中粗。
3. 暗褐色土, 草根多量含有, 玉砂利, 炭化物微量混入, 中粗。
4. 暗褐色土, 炭化物含有, 中粗。
5. 暗褐色土+微小礫 (2:8), 極めて粗。
6. 暗褐色土+基盤質微小礫 (2:7), 粗。
7. 基盤質微小礫 (4:4), 中粗。
8. 暗褐色土+基盤質微小礫 (4:6), 極めて粗。
9. 暗褐色土+基盤質微小礫 (6:4), 中粗。
10. 暗褐色土+基盤質微小礫 (8:2), 中粗。
11. 暗褐色土+基盤質微小礫 (8:2), 中粗。
12. 暗褐色土, 基盤質微小礫少量含有, 炭化物, 微小玉砂利微量含有, 中粗。
13. 暗褐色土, 基盤質微小礫少量含有, 中粗。
14. 暗褐色土, 基盤質微小礫少量含有, 中粗。
15. 暗褐色土+基盤質微小礫 (2:8) 粗。
16. 暗褐色土, 小礫微量, 中粗。

SPO



- 改良土面
- ▨ Or-a
- ▧ 排水路
- ▩ 溝
- 溝

0 20m

考えられる。その深さは約105cmである。土塁頂部の欄列跡を示す溝が掘り方に接する状態となっている。相対する東側部分は欄列溝の検出されている土塁上、通路面、階段ステップの下部等に於ても検出することはできなかった。自然研究路の整備工事の折に路面が掘り下げられ消失したものと推測される。

b 柱跡

門跡南には菓研の空塚がつけられている(空塚Aと仮称)がこの北斜面に対をなす柱穴列が2組検出された。空塚北斜面壁の砂岩質基盤に掘られており、30×50cm程の不整形の掘り方を呈し、40cm前後の深さである。一対の柱間隔は190~210cmである。西側柱穴列は北の門跡柱痕跡と一直線上にある。空塚Aの南斜面壁には16~18cmの深さの柱穴様の穴が2個検出された。がこの二柱穴?の間は140cmと北斜面に比し短くなっている。空塚Aの南側肩の部分に80×100cm程の大きな石が検出された。石の上面は殆ど平らにされていて、地盤からの高さは58cm程である。この石と門跡柱痕跡を結ぶ線上に西側柱列の揃うことから、柱(穴)の代用が想定されるのであるが、相対する東側に柱穴等を見出す事はできなかった。

空塚Aの南空塚Bとの間及び空塚Bの中央に3組の柱穴が対をなして検出された。20~30×30~40cmの隅丸方形で深さ35~50cm、方形の柱痕跡がみられた。対をなす柱穴間は210cm余りである。この西側の柱穴列は空塚A北斜面西側柱列、門跡柱痕跡と一直線上に並ぶが、相対する東側の柱穴との距離が広がっている為、東西両列が完全な平行関係にはなっていない。

空塚Bの中央で検出された柱穴はBを埋める覆土の上位から掘り込まれており、Bの塚の廃棄後の所産と推される。

空塚Bの更に南については調査をなし得ていないので、更に南に続くかどうかは明らかでない。

c 旧道跡

昭和55年の調査で空塚Aをわたる土橋状の旧道を検出した。この旧道は最下端、空塚A塚底近くに自然堆積層を有していることから上限を空塚Aの自然埋没、廃絶後に、その道路面上にOs-a火山灰が堆積している事からその年代1741年を下限に把えていた。昭和58年空塚A北東斜面25]6区等でこの旧道の続きが検出され本年調査の自然研

究路下部にその中間のある事が予想されていた。又当初はこの階段下に空塚A機能時の道路、土橋がある事も想定していた。

空塚Aの北斜面を斜行する1m余のやや平坦な面を検出し、その北側は片切りがなされ南側は路肩状に傾斜の認められた事などから旧道跡とした。層位的にはOs-aの下位にあり、それ以後と見られる人工的な盛土粘土層や、埋没時の砂岩基盤崩落層とも異った腐蝕層に近い、固く締った土として扱えられたものである。

(4) 出土遺物 (PL.20第3図)

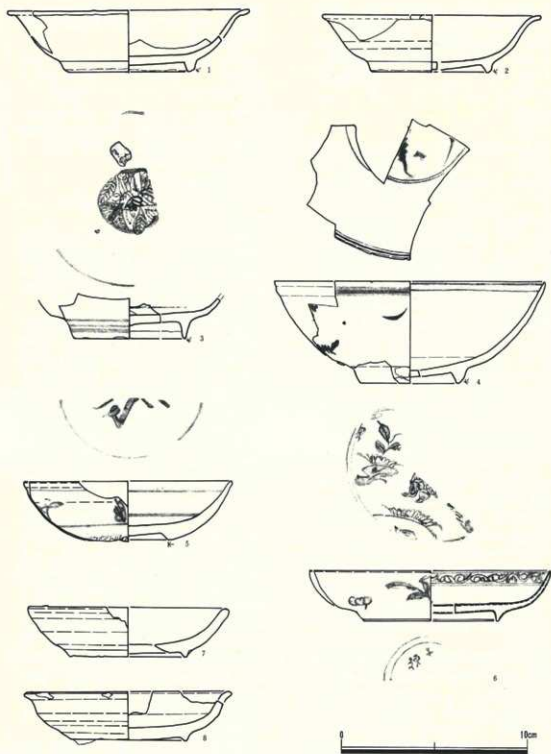
自然研究路下空塚A、B覆土等から出土した遺物を別表2に示した。

青磁: 碗・皿の破片である。碗は外面に剣先型の蓮弁が省略されたもの。雷文が簡略化され柳状の工具で波状に表現される低平で高台の厚く外へ開くもの等の口縁部破片他で7片、皿は桜花皿と思われる口縁部破片1点である。

白磁: 碗、皿である。碗は轆轤成形蓮子型に近い硬質感のある胴部破片2、やや肉厚で、強く彎曲する腰部破片1である。口縁に簡単な波状文等が施される低平な碗であろうか。皿は小破片もあるが、硬質感のある端反りをする一群である。胴下部分破片に漆による補修の痕が残るものもある。白色で硬質の強い光沢のあるものと灰味の強い二者がある。(第3図1、2)

染付: 碗及び皿が出土している。碗は高台が高く、見込みが広い底部破片で、口の開く端反り碗となると思われるもの、蓮子碗型のもの、小破片5点である。端反り碗と思われる底部破片は見込に複圈を廻らし中央に丸く、くさばなを描き、高台外面に3条の線を廻らせている(同3)。蓮子碗は外面と見込みに梅月文も描くものである(同4)。皿は端反り付高台系底の口縁部、胴部破片3、菴筒底の丸皿、付高台系底の低平な丸皿である。端反りの皿は、見込に玉取獅子文の描かれるものであろう。菴筒底の皿は外面に梵字?を配し、見込みに寿字文の1部?を残すものである(同5)。低平な丸皿は、外面に果実と折枝を描き、内面口縁下に唐草文を配している。見込には唐子の下半身等が描かれ、高台裏には「大? 徳…」の銘が複圈線内にある(同6)。

美濃灰釉: 端反り口縁・丸皿・不明の胴 底部破片が出土している。図示した以外には端反り口



緑破片1、丸皿口縁破片2等が認められる。図示した8は底部に軸だまりを生じ、水平に置けないものである。

美濃鉄軸：碗3片、皿1片が出土している。碗は所謂天目茶碗の頸部、胴部破片各1、高台部破片1である。高台部破片は、外面に鬼板を塗布した内反り高台であるが、僅かに削りがみられ、輪高台様を呈している。高台脇の削り巾は3ミリ程である。見込みの軸調は黒褐色で胎土は軟かい。皿は口縁部破片1点である。高台が揚底状に削り出され、やや外反する器形であろう。内外とも胎釉が施されている。

越前：播鉢胴部破片2、叩き整形の裏の胴部破片1が、出土している。播鉢は押し目9条で内面見込み近くに黒い煤状のものが付着している。

鹿の歯：空壕中央柱穴内から鹿の歯が出土した(PL.18)。

(5) 小括

昭和54年一部を検出した大型の柱穴は、岩盤を深く掘り下げた堅牢性を意識したつくり、空壕直上の土塁開口部という位置、長方形を呈する柱底等から門柱跡のそれとして誤りはないであろう。これに相対するもう1個の柱穴は、空壕内で検出した柱穴の軸線を延長すると丁度、自然研究路階段ステップ下にあたり、この工事によって消失したとせざるを得ない。

空壕斜面等を経て南へ連続する対をなす柱穴列は、殊に西側のそれは門柱跡柱痕跡まで軸線が通っており門柱部分を意識したものである。柱穴間距離に差異があったり、明瞭な対を決定出来ない状態もあるが、二個一対が空壕の外から中への線を意識していると考えたい。その形成時期は、空壕Bの覆土上から柱穴が掘り込まれている

事から、空壕Bの埋まった鹿絶後を上限とすることができよう。従ってこれは空壕Aが機能していた時期に、それを渡る施設として設けられるとするのが自然と思われる。又、空壕Aの土層観察に於ても柱穴が壕の埋没後に掘り下げた事を示す例はみられなかった。更に空壕Aの埋没後には旧道(跡)があって機能していた事もこれを傍証するものとなるのではあるまいか。

こうした柱穴2個を一对とした下部の構造を有する壕をわたる施設として、橋の存在を想定することはそれ程無理ではないと考える。只前述した所でもあるが門柱部分から空壕Bの中央迄約25.8m余が連続した遺構であったかについては明らかにし得ない。又、この柱穴列が橋の下部を示すものであるならば、南端のそれは、単純な一対とは異った構造も想像されるのであり、空壕Bの南側を調査する必要もあると思われる。

出土した陶磁器は16世紀に使用されたものであろう。青磁蓮弁文碗、染付端反り碗などはその前葉から、連子碗、美濃鉄軸碗底部破片は中葉から、青磁の低平な碗、染付基底の丸皿等は後葉からの使用と推している。尚、遺物出土地点、出土層位についての細い検討は、まだできていない。

勝山館跡の南方では三条の空壕跡が検出されている。過去の調査で、相互の重複関係から内(北)側程新しい事が判明している。これは順にA、B、Cと付して仮称している。

60年度調査で検出した、橋脚?柱跡は一部が空壕Bの覆土から掘り込まれており、この壕の鹿絶後、空壕Aの機能していた時期にAに付随して存在していた事が判明し、上述の壕の推移とも符合するものであった。(松崎)

2. 第9号地割面の調査

(1) 調査目的

昭和58年度迄の調査で、勝山館跡は空壕の内側、土壁、櫓列部分を頂部とし、そこから北東へ向って前面上に階段状に平坦面をつくりだされてあり、それぞれに遺構の存在することが判明した。中央南から北に自然研究路が通り、その道の東西(右左)に段が互い違いにつくられていた。しかし、その段毎の遺構の性格等については充分把握するに至らず、建物跡は西側に限定されるのではないかとこの推測を試みたりした。

又、この館跡を構成する主たる遺構である掘立柱建物跡と、竪穴遺構の年代差について、他の類似遺跡では殆んど共存しているが、本遺跡では前後の時間差が想定されたりもした。更に昭和59年度、付屋敷跡の発掘調査では該種遺構は全く発見されず、館中央部にのみ存在する事も推測される所となった。

本調査区はこの前面に作り出されている階段状の平坦面のうち、研究路東側に位置し、一部トレンチ調査が行われ、櫓、柱穴状遺構等の存在が予測されていたため、上記の解明の為に発掘調査を行う事とした。

土塁頂部からこの地区一帯は、『館神八幡宮跡周辺部』として、整備事業のポイントとなっている事からも、過去の調査内容の再吟味を併せて行い整備の条件を整える事も同時に目途した(松崎)。

(2) 層序

SPA-A' (附図3) ①23K10区、15区を南北に走っている3本の溝の新旧関係、②23K14区附近の館機能時における道路面の存在、以上2点を明確にすることを目的とした。その結果①については掘りこみ面がすべて同一の層であり新旧関係は明確にし得なかった。②についてはⅢ-1層ロームブロック層がややフラットな面をもつため旧道路かと考えたが路肩が検出されずその可能性は殆んどないと考えられ明らかでない。

SPC-C' (附図3) 図上中央部に位置する柱穴覆土5(柱根)より美濃灰軸端反り口縁皿が出土している。当柱穴の覆土堆積状況より見ると当柱穴使用後埋め戻しを行っており、美濃灰軸皿は当柱穴が使われなくなってから柱底に落ちこんだとは考えにくい。よって美濃灰軸皿と当柱穴が使用された時期はほぼ同時期と考えられる。

SPF-F' (附図3) 昭和58年度トレンチ箇所西壁セクションである。図上左端、南側の地割を区画する段覆土の堆積は黄色砂粒と黒色腐植層が交互に堆積し自然埋没の様相を呈する。また図上中央部32号竪穴遺構の堆積状況は23号竪穴遺構と同様埋め戻しを行なっているが覆土中央部に黒色-黒褐色の腐植土(図上18、19)が見られ二度にわたる埋め戻しを行なっている。また当竪穴遺構と重複するP69、P67について前者は当竪穴遺構覆土を掘りこんで作られた可能性もあり、当竪穴遺構と同時により新しい時期のものであり、後者は当竪穴遺構覆土によりその立ち上がり部分が消滅していることより古い時期のものであることが判明した。北側の地割を区画する段は3本検出された。その新旧関係及び堆積状況はまず67、68を覆土とする溝が掘りこまれ、その後65、66を覆土とする溝がこれを切って作られる。そして64のロームブロック層(張りローム)により二つの溝は埋められ62の焼土、炭化物が堆積する。周囲の柱穴はこの層直下を掘りこみ面としており一時期生活面として機能していたと思われる。次にロームブロックを多量に含む10YR5/4にぶい黄褐色の61及びロームブロック層の61によりつき固められ、上にロームブロックを微量に含む10YR5/4にぶい黄褐色の59及び57の面が堆積する。この面は若干の腐植が進行しており前述の焼土、炭化物層に引き続き次の時期の生活面と考えられる。38-50を覆土とする一番新しい溝の掘りこみ面は55-56上面となっているが、55、56の面がフラットではないこと、斜面の上からの流れこみ様の堆積をしていることより、この溝が機能していた時期は55、35の面ではないかとも考えられる。さらにこの溝の時期と前述の32号竪穴遺構の時期は掘りこみ面より考えるとほぼ同一の時期か、あるいは溝の方が新しいと考えられる(斉藤)。

(3) 遺構

調査の結果、段状に平坦面をつくり出し、溝で区画し、掘立柱建物、竪穴遺構等を設けていた事が判明した。他に焼土、炭化物集中箇所、土壇などが検出された。

a 段、溝

南の高い方を削平して、平坦面をつくり出すと同時に次の平坦面との間に段差をつくり、東側筆ノ沢寄りの傾斜部分に土盛りをし、より広い平坦

面を作り出している。南及び北の段直下と西側(中央寄り)と、東側(華ノ沢側)には溝が廻り櫛列が設けられることが判った。

この地割面の大きさは、最大東西22m、南北12mで真中付近でL状に屈曲し東西の2面に分れる。東面北部4×6.5mの範囲は20~40cmの盛土を行っている。

溝は華ノ沢側に南北方向に2条、中央道路沿いに3条、南側では西面に2条以上、東面に4条が検出された。

1号溝：華ノ沢側、斜面肩から2.5~3.5mのところに斜面に平行して南北に6m程、南は西に折れて5.5m程認められる。南北方向は巾20~30cm、深さ20~40cmで中に径6~8cmの小柱穴が不規則にある。東西方向は巾20~30cm、深さ10cm程で小柱穴は殆んどない。南北方向の溝の北4m余りは盛土以前のIV層直上が掘り込み面となっている。この溝は西進して地割面真中屈曲部分で北へ延び、この地割を二分していた可能性もある。

2号溝：地割面南に東西方向に15m余の長さを有し、西端は北へ4m程折れ曲って消失する。東端は、南へ1.5m折れ曲る場合と華ノ沢方向へ延びて消失する二者が想定される。厳密には両者の重複関係を示すものと思われるが明らかにすることはできなかった。又西半分も他の溝と重複、共有関係にあり単一のものとはできない。又、中央屈曲部で東西が交差し一本とはならない可能性もある。溝の巾20~40cm、深さ20cm程で溝中に小柱穴は殆んどみられない。

3号溝：地割面西側、自然研究路寄りに南北に走る3条の溝の真中に位置するもの。南北7m弱、北は次の段(地割面)を画する溝に接し、南は、径60cm、90cmの大きな柱穴?と重複し、詳細は明らかにできないが、東へ折れて2号溝に重なっていく事が推測される。溝の巾、30~50cmと広く、深さは10~20cm程である。溝内に無数の小柱穴が不規則にある。

4号溝：地割面西端を南北に画し、南で西進し華ノ沢へ至り、沢際は細い南北の溝となる。西側北端は次の地割を画する溝に至り、南は東へ折って2号溝と重なり華ノ沢側へ至るとされる。西側に折れて別な地割を画するようにもみえるが、西側の調査等からは、新たな地割を設ける空間は少ない。東側、沢沿いの細い溝は平坦面を広くする

為に土盛した上に掘り込まれたものである。中間が、不明瞭であるが、北へ連続して延びるものと推測した。西側南北方向の溝は長さ7.5m、巾50cm、深さ10~20cm余で無数の小柱穴を不規則に有する。南、東、西方向は長さ19m、巾40cm程、深さ10cm弱、東側半分のみ若干の小柱穴がみられる。東沢沿いの南北溝は長さ8m、巾20cm、深さ15cm程で、小柱穴がみられるものである。

東面南部の溝の前後は土層図によれば1、2、4号溝の順に新しく、又1号溝の北半の掘り込み面が、平坦面の盛土形成前であることも1号溝がより古い事を示している。

溝には巾が狭く小柱穴列がやっと1列並ぶものと複数列並ぶものがあり、前者は沢よりあって比較的深い。櫛列の機能が考えられる。後者は建物の周囲を劃するものであろうか。

b 掘立柱建物跡

地割面全体が真中付近で屈曲して東西の2面にわかれており、東面で4時期、西面で3時期の掘立柱建物跡が検出された。東西の対応関係については必ずしも明瞭ではないが、既に記した溝遺構の区劃をもとに以下に記述する。

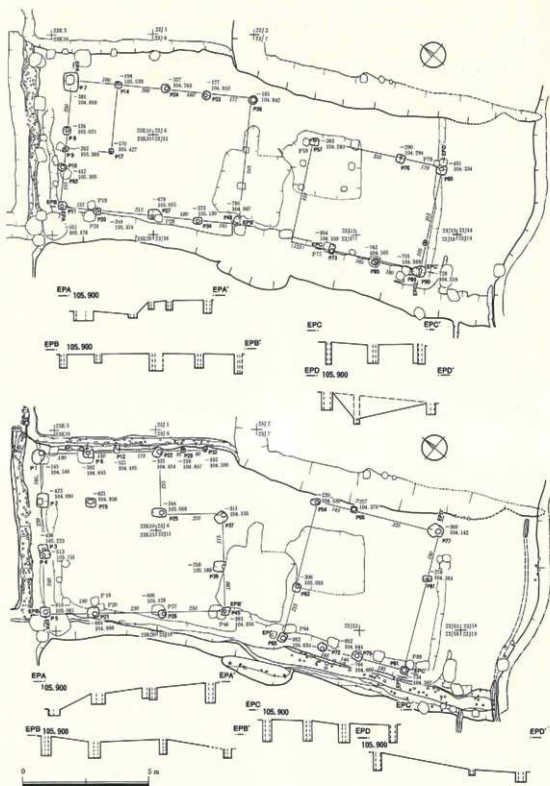
第I期掘立柱建物跡：第1号溝に劃された内側で検出された遺構である。P-82、78は1号溝と同じく盛土平坦面下にその掘込み面があり、P-67が32号竪穴遺構より以前に掘り込まれていることから軸線を殆ど同じくする1号溝の時期の建物跡と推定した。全容は梁間2間、桁行3~5間の建物であろう。梁行390、桁行(528)cm、柱穴掘り方、柱痕跡は方形。柱間は100cm~178cm。柱穴の大きさ35cm×30cm程、深さは22.4cm~62.3cmである。

後述の32号竪穴遺構はこの建物跡には遅れるが、1号溝の時期と思われる。

第II期掘立柱建物跡：第2号溝遺構に劃された中に検出された遺構である。東面と西面各々にある。³¹東面北東が盛土整地された後の最初の遺構である。

東面の1棟(II-a)は梁間2間×桁行3間で、梁行442cm、桁行492cmで、掘り方、柱痕跡とも方形。柱間は各195cm、247cm、142cm~180cm。柱穴の大きさは30cm×35cm程、深さは10.9cm~80.5cmである。

西面、II-bは梁間3間×桁行3間で、梁行



第5图 9号地剖面建物跡想定図

520cm、桁行520cmで、柱間は170cm、180cm、160、180cm程で、柱穴の大きさは32cm×35cm、深さ9cm～75cmである。

第Ⅲ期掘立柱建物跡：第3号溝に削された中に検出された遺構である。東面と西面にある。

東面の1棟は一部のみで全体を明らかにすることはできなかった。2間×3間、あるいは3間×3間と思われる。梁行(418)cm、桁行(520)cm、掘り方、柱根跡とも方形である。柱間は各105cm～(313)cm、(155)cm～185cmで柱穴の大きさは24cm×40cm、深さは29～86.4cmである。P57は32号竪穴覆土上面からの掘り込みである。又P73は72を切っており、80は1号溝を切っている。

西面の1棟は3間×4間で梁行505cm、桁行717cm、柱間は各150cm～200cm、155cm～217cmである。掘り方、柱根跡とも方形である。柱穴の大きさは40cm×55cm、深さ13.6～67.9cm程である。P20はP19を切り21に切られている。P27はP28に切られており、P10はP92を切っている。東側の梁行は23号竪穴で切られているため不明である。西側の梁行P8～10は出入口等の施設に関連するものかも知れない。

第Ⅳ期掘立柱建物跡：第4号溝に削された中に検出された遺構であり東西両面にある。

東面の1棟は部分的検出であるが3間×3間の建物かと推測される。梁行565cm、桁行500cm、柱間は各190cm～215cm、140cm～195cm。掘り方、柱根跡とも方形で、柱穴の大きさは、30cm×40cm、深さは22～86.2cm程である。P72、75、91は1号溝を切っており、又P62は32号竪穴遺構を切っている。

西面は3間×3間で梁行650cm、桁行680cm、柱間は各180cm～240cm、190cm～250cmである。掘り方、柱根跡とも方形で柱穴の大きさは37×40cm、深さ19.2～81cm程である。P21は20を、28は27を切っている。P39、45は、23号竪穴遺構に切られている。北東隅の柱は、検出されず、不明である。

註1 溝、建物跡の時期、規模等については、鈴木亘先生にご教示を賜わった。誤りは筆者の責である。

2 溝の記述にもあるように、この両者の同時併存は、一応の仮定である(以下同じ。)

c 焼土

本地剖面で7ヶ所の焼土溜りを検出した。建物

内で炉として使用されたものもあるとは思われるが、その帰属を決定することはできなかった。焼土を採集し、フローテング、磁着作業等によって成分の抽出を試みた(別表1)。

焼土1(附図3) 23J12-4区、32号竪穴遺構南東隅の覆土上面で検出した。30×15cmの楕円形。黒色の砂鉄?粒径2～5mm程の磁着する石粒、径2～7mmの内部が空洞化し、磁着しない鉄滓とともに炭化米、魚骨、炭化した堅果片を抽出した。

焼土2(第6図) 23J13区にあり直径26cmの不整形円形を呈する。断面は不整逆台形状を呈し壁面は急な角度で立ち上がる。底部にはゆるい傾斜がつく。覆土表面は中央部が厚くなり、山状に隆起する(斉藤)。

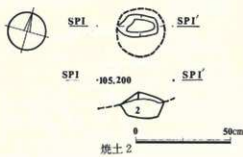
黒色の砂鉄?、粒径5mm以下の磁着する石粒、魚骨片、炭化米等を抽出した。

焼土3(第6図) 23J13区にあり長軸56cm、短軸46cmの不整形円形を呈する。断面は播鉢を横転させたような形状であり壁面の一方はゆるい立ち上がりをもつが、もう一方は立ち上がりを殆んどもない。これは傾斜地のためレベルの高い方を掘りこみ、レベルの低い方を削る程度に於いて底部に平坦面を作出していると考えられる。覆土の堆積状態より見ると2回にわたりこの場所で火を使用したと考えられる。それはまず一度地面を断面形のように掘り下げ6(以下番号は図上覆土)で火を焚く。ところがさらに同一の場所で火を焚く場合、下地が一般的な土壌と焼土に分かれている場所により火力にむらが出ることになる。均一な火力にするためには下地の吸水性、乾燥度等が一定でなければならない。そのために4、5を6、7の上に盛土し下地の吸水性・乾燥度をほぼ一定にしその上で再度火を焚いたと考えられることによる(斉藤)。

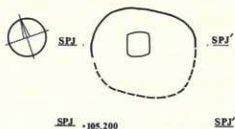
抽出した成分は黒色の砂鉄?粒径3mm以下の磁着する石粒、魚骨である。

焼土4(第6図) 23J14区にあり長軸25cm、短軸17cmの不整形円形を呈する。断面は不整逆台形状であり、一方の壁面の立ち上がりが他方に比しややゆるやかである。覆土は1(図上覆土)の堆積後・上面に何mm程純焼土層が薄く堆積するようである(斉藤)。

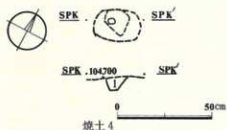
抽出した成分は、黒色の砂鉄?粒径2mm以下の磁着する石粒、2mm以下の内部の空洞化した鉄



1. 2. 5YR5/6明赤褐色、焼土純層

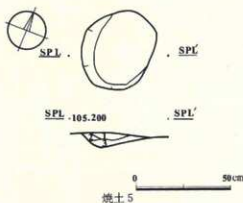


SPL · 105.200 SPL'

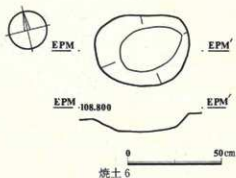


1. 10R5/8赤、焼土純層

1. 2. 5YR5/6明赤褐色、赤、焼土純層
 2. 2. 5YR4/6赤褐色、赤、焼土純層
 3. 7. 5YR5/6明赤褐色、やや赤、焼土純層
 4. 10YR4/3C-5C 濃い黄褐色、ロームブロック、炭化物含有、赤、焼土純層
 5. 10YR5/6黄褐色、赤、焼土純層
 6. 2. 5YR4/6赤褐色、やや赤、焼土純層
 7. 10YR4/3C-5C 濃い黄褐色、炭化物含有、赤、焼土純層



1. 赤褐色、焼土粒多量混入、粒状、粗粒。
 2. 暗褐色、焼土粒微量混入、整粒。
 3. 褐色、焼土粒、炭化物微量混入、弱粘性、整粒。



EPM · 106.800 EPM'

第6图 9号地剖面烧土·平面·断面图

滓？、小焼骨片微量である。

焼土 5 (第 6 図) 23J 6 区にあり長軸 43cm、短軸 37cm の不整形円形を呈する。断面は掃鉢を横転させたような形状で焼土 3 と同様一方の壁面はゆるい立ち上がりをもつが、もう一方は立ち上がりを殆んどもない(斉藤)。

抽出した成分は、黒色の砂鉄？粒径 5mm 以下の磁着する石粒等である。

焼土 6 (第 6 図) 23J13 区ほぼ中央にあり長軸 50cm、短軸 37cm の不整形円形を呈する。断面は偏平な不整逆台形状を呈し一方の壁面の立ち上がりが他方に比しややゆるやかである。底部はやや傾斜をもつ(斉藤)。

焼土 7 23J11-2 区、23号竪穴遺構覆土上面で検出された。17×13cm 程の楕円形を呈す。抽出した成分は、粒径 5mm 以下の磁着する石粒及び木炭である。

焼土 8 本地剖面の 1 段北東、23J 7-1 区未命名地剖面内に位置する。調査区北境、壁際で検出した部分のみ採集分析を行った。火熱を受けた礫が認められた。抽出し得た成分は黒色の砂鉄？、粒径 3mm 以下の磁着する石粒、4×10mm 以下の棒

状乃至は 2-3mm の粒状で中の空洞化した鉄滓、炭化米、パン状の炭化物、炭化した禾本草植物の茎等である。

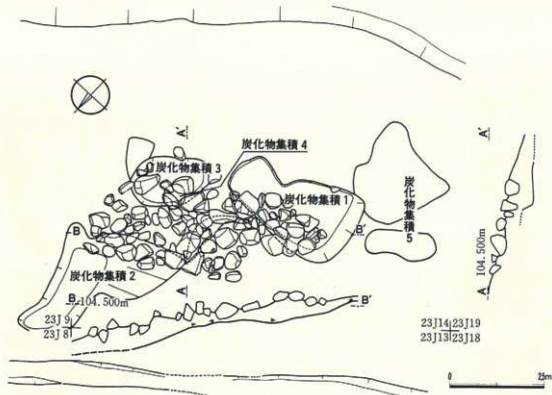
d 集石・炭化物堆積遺構(第 7 図)

当地剖面北東部、23J14-1、3 区で、集石及びその下位で炭化物の堆積が認められた。本地区は 1) で既述のように、盛土をして平坦面を作り出している部位である。集石はこの盛土層を除去した後に検出されており、第 1 号溝の時期に近い所産と考えられる。集石は南北 2.5×東西 1.5m の範囲に分布する。丸味を有する河原石のみで 10-25cm 程の径の大きさのものである。熱を受けたり、加工を施した形跡はない。

集石の下位に 3 箇所の集積部を中心とする炭化物の堆積が認められた。更に集積 3 の下位には 20×25cm の円形に炭化物、骨片の集中がみられた(炭化物集積 4)。

又集石の南に 2 箇所の炭化物の集積(炭化物 5)が認められた(表 1)

これらの炭化物検出層の下位には更に 1 枚の整地盛土層が 10-20cm 堆積し、その下位に第 IV 層が堆積している。炭化物周辺で幾つかの柱穴を確認し



第 7 図 集石・炭化物堆積遺構図

た。確認は殆んどⅣ層上面に近いが、本来的にはⅣ層直上のいわばⅠ期整地盛土層上面が掘り込みかと推される。

炭化物集積1: 1.4m×70cm程の分布範囲を持つが途中くびれて不定形をなす。堆積の厚さは2~4cm程。抽出された主な成分は黒色の砂鉄?炭化した堅果、パン状の炭化物、縄、禾本科植物の茎等である。縄としたものは 径4mm程の太目の条2本を撚り合わせたものと2mm余の細身の条2本を撚り合わせたものである。縄は1段L (r, r) である。¹¹⁾

炭化物集積2: 23J14-1から、23J9-3区に分布する。70cm×1.5m程の広がりがあるが形は不定形である。堆積の厚さは厚い部分で10cm程である。抽出された主な成分は、黒色の砂鉄?、径3mm以下の磁着する石粒、厚さ1mm以下、大きさ1cm以下の磁着しない鉄滓?、5mm以下の空洞化した粒状の磁着しない鉄滓、有機物とした、パン状の炭化物、大豆様の炭化物、堅果、魚骨、禾本科植物の茎、縄、炭化した骨角器?木炭等である。

魚骨の中には、径1cm余の椎骨もある。縄はいずれも長さ1cm弱のものであり、Lとできるもの7点、R1点である。糸の太さ1mm余のもの、2~3mmのもの、5mm程のものがある。結びとめてあるもの、木片の付着しているものなどがある。木炭がスミとして作られたか部材等の炭化したものかは充分に観察し得ていないが、燃え残りの木質部はないようである。炭化した骨角器は中柄の基部と身の欠損品で身は片面平なカマボコ状で先端偏平となるもので、基部は円形に金属器で成形されている。

炭化物集積3: 23J14-2、4区に50cm×1mの範囲で検出された。堆積の厚さは1~10cmである。抽出された主な成分は、黒色の砂鉄?径3mm以下の磁着する石粒、8×6mm程の磁着する礫の薄片、径3mm以下の空洞化した磁着しない鉄滓?有機物とした炭粉質?の炭化物、禾本科植物の茎等である。

炭化物集積4: 3の下位で25×20cm程の範囲にみられた骨粉等の集積部分である。10cm程の落ち込みから、黒色の砂鉄?2mm以下の磁着する石粒、魚骨小片が抽出された。

炭化物集積5: 23J14-3区、集石の南側で、1m×90cmの菱形と75×25cmと長円形の二部分か

らなる。ともに1~2cmの厚さであるが部分的に20cm余の堆積を示すところがある。抽出された成分は、黒色の砂鉄?、径5mm以下の磁着する石粒、1cm以下の磁着する礫の薄片、5mm以下の空洞化して磁着しない鉄滓?3.5×2mm程の大きさの炭化米の固着したもの(表1米)、径1mm程の粒状の種子の固着したもの(同粟?)、骨片、及び木炭である。

e 土壌

本地剖面で2基の土壌が検出された。

1号土壌(第8図) 23J11区にあり長軸68cm短軸62cmの不整形円形を呈する。断面は播鉢状を呈し底部はやや丸味を帯びる。覆土にはすべてロームブロックが多量に含有され、埋め戻しの状況を呈する(斎藤)。

4mm以下の磁着する石粒、径3mm以下の空洞化した磁着しない鉄滓?鉄、3.5×2mm程の炭化米の固着したもの、6×4mmの炭化した豆状のもの、粉食物状の炭化物、木炭を抽出した。

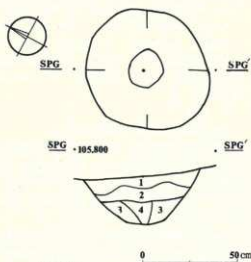
2号土壌(第8図) 23J14区、9区をまたぐ位置にあり直径78cm程の不整形円形を呈する。断面は不整逆台形状を呈し、両方の壁面の立ち上がりは急である。底部にはゆるい傾斜がつく。覆土は全体にやわらかく褐色~黒褐色を呈しており、覆土2には骨粉が含有される(斎藤)。

4mm以下の磁着する石粒、1cm~2.3mmの空洞化した鉄滓、堅果、魚骨、木炭等を抽出した。

f 竈穴遺構

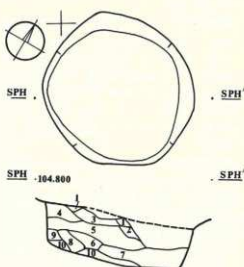
本地剖面で2基の竈穴遺構が検出された。

32号竈穴遺構: 地剖面東面中央に位置する。辺が2.5m程の方形で西中央やや北寄り出入口と思われる50cm程の舌状の張り出しを有する。南壁は調査を誤り、土層断面図によって位置を修正してある。舌状張り出し部西南は23号竈穴遺構と接する。南壁西隅上、P93で切られ、更にその上位で焼土1が検出されている。西隅はP62で切られている。又、層序の項で触れられているように北壁はP67が埋没後に掘り込まれた事を示している。床面中央付近はしまっていて比較的安定している。中央南西よりに70×60cm、厚さ2~3cmの炭化物の堆積がみられた。南壁から西壁中程まで北壁から東壁中程まで周溝が検出された。周溝の深さは10cm程、巾15cm前後である。北壁沿いは、やや巾広である。内部に6個所の柱穴が認められ



1号土坑

1. 2.5Y 6/4にいい黄色。ロームブロック50%含有。密。
2. 2.5Y 5/3黄褐色。ロームブロック25%含有。密。
3. 2.5Y 4/3オリーブ褐色。ロームブロック80%含有。やや粗。
4. 2.5Y 4/6オリーブ褐色。ロームブロック30%含有。



2号土坑

1. 2.5Y 7/6明黄褐色。粗。
2. 2.5Y 6/4にいい黄色。骨粉含有。極めて粗。
3. 10YR 3/2黄褐色。粗。
4. 2.5YR 5/6黄褐色。ロームブロック粒徑1mm少量含有。やや粗。
5. 10YR 4/6褐色。ロームブロック粒徑1mm少量含有。
6. 10YR 4/4褐色。粗。
7. 10YR 3/4暗褐色。粗。
8. 2.5YR 4/4暗色土。粗。
9. 2.5YR 4/3暗色土。粗。
10. 10YR 4/6暗色土。粗。

第8図 9号地割面土坑平面・断面図

た。掘り方、痕跡ともに方形で深さは17~30cm余である。壁高は南壁で(45)cm、北壁で10cm余である。舌状の張り出し部分はゆるやかに高くなっていくが、この両側に巾10~20cm、深さ4.5cmの溝がつくられ径5~7cmの小柱穴が検出された。出入口の施設に関連するものであろうか。

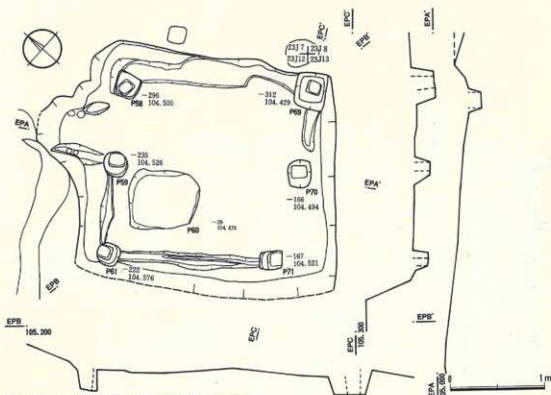
炭化物として採集した土坑中から、黒色の砂鉄?径3mm以下(8~5mのものも数個ある)の磁着する石粒、3mm程の空洞化した磁着しない鉄滓?及びその固着したもの、最大3cm以下の木炭片、及び魚骨を抽出した。

本堅穴はP67を有するⅠ期建物遺構よりは新しくP57のⅢ期、P62のⅣ期よりも古いとすることができる。更にその軸線がⅠ期の溝に近いところから、Ⅰ期とⅡ期の間Ⅰb期を想定している。

23号堅穴遺構: 昭和58年度の調査で存在が確認されていた遺構である。地割面中央に位置する。一边が2.6m余の方形で北、中央やや西寄りに出

入口と思われる1m余の舌状の張り出しを有する。北壁半分は検出し得なかった。北東には32号堅穴が隣接している。西壁はP39、45を切って形成されている。南壁での壁高は82.2cm、北は張り出し部分がゆるやかに高くなっている。床面は凹凸があり不安定であった。馬蹄は認められない。内部に8個の柱穴が認められたが、完全な対応は示していない。掘り方、柱痕跡とも方形と思われるが充分に検出出来ず、不定形のものもある。深さ20cm前後、大きき25cm程である。調査中、東壁南半、西壁中央付近の下位床面より10cm程上位で壁に径10cm程の横穴?状の存在が指摘されたが、対応等に規則性を見い出せず、今後の調査例にまつこととしたい(松崎)。

層序SPD-D'(第10図) 埋め戻しを行なった堆積状況を呈する。調査中には3個のビットが23号堅穴覆土上面から掘りこまれていたと解釈したが、レベル、位置等より見ると図上3、4上面



第9図 9号地剖面32号竪穴遺構平面・断面図

面であり、すぐ上の層はロームブロック層があり埋め戻し土の一部である。このことよりこの3つのピットがこの竪穴より新しい柱穴等とは考えられず単なる覆土中のくぼみと解される（斎藤）。

P39、45は、本地剖面で最も新しい期の掘立柱建物跡とした所でありその柱穴を切っている本竪穴は更に新しい期としなければならない。又、層序の観察からは、この竪穴がある時点で人為的に埋め戻された事が示されており、更に新しい時期の遺構が予測される所である。未だ本竪穴覆土内や、周辺部の遺物の検討が充分でない為、これと併せ後考してみたい。

(4) 出土遺物

a 陶磁器

本地剖面から出土した陶磁器を別表に示した。

青磁：碗、皿及び盤が出土している。

碗は外面に蓮弁を簡略化した刻線の描かれるものが殆んどである。見込みに印花の押される例がある。高台裏は蛇の目又は無軸である。他に簡略化した雷文を外面に描く低平な碗、無文の碗などがある。

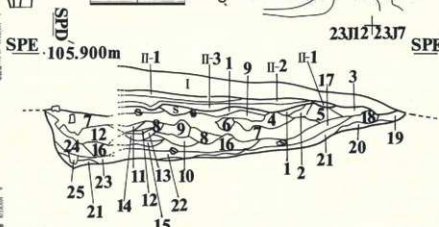
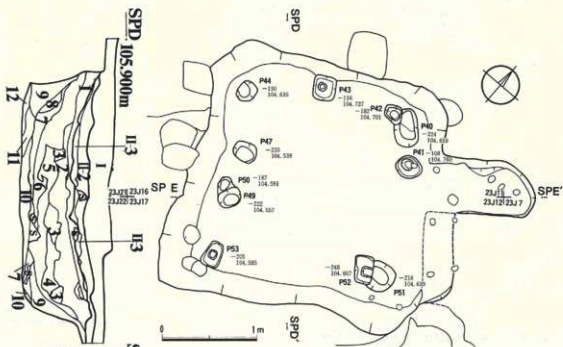
皿は桜花皿である。口径13cm、底径6cm、高さ3.3cmの丈高のものと3cmのもの、口径12cm、底径5.5cm、高さ2.5cm弱のもの三者がある。

盤は当地剖面より南、館沖八幡宮跡、遺物廃棄場所等に広く散布のみられるものと同一個体のものである。

白磁：碗、皿、盤が出土している。

碗は胴部破片のため詳細は不明である。

皿は外面高台脇以下露胎で、高台を挟り、内面に目痕を有する丸皿で軟かい陶質のものと同硬質のもの、同じ器形で全面施軸の硬質のもの、端反り口縁で硬質のもの、腰を持たず外反するもの等が主である。口縁が外反し、腰部に強い段を有するものがある。腰部以下は露胎となるようであり、軸調は灰色で陥入がある。端反の器形で、外面高台量付き以下、内面見込み無軸の陶質のものがある。軸調は淡い青磁軸に近いもので内面下部に浅い削りか横環する。又径5cmの底部破片がある。見込みが蛇の目に軸が拭われ、畳付以下露胎である。軟かい陶質のある胎土で陥入がある。



- 1. 101号 居室
- 2. 101号 居室
- 3. 101号 居室
- 4. 101号 居室
- 5. 101号 居室
- 6. 101号 居室
- 7. 101号 居室
- 8. 101号 居室
- 9. 101号 居室
- 10. 101号 居室
- 11. 101号 居室
- 12. 101号 居室
- 13. 101号 居室
- 14. 101号 居室
- 15. 101号 居室
- 16. 101号 居室
- 17. 101号 居室
- 18. 101号 居室
- 19. 101号 居室
- 20. 101号 居室
- 21. 101号 居室
- 22. 101号 居室
- 23. 101号 居室
- 24. 101号 居室
- 25. 101号 居室

- 1. 101号B 公共化粧室
- 2. 101号B 洗面化粧室
- 3. 101号B 洗面化粧室
- 4. 101号B 洗面化粧室
- 5. 101号B 洗面化粧室
- 6. 101号B 洗面化粧室
- 7. 101号B 洗面化粧室
- 8. 101号B 洗面化粧室
- 9. 101号B 洗面化粧室
- 10. 101号B 洗面化粧室
- 11. 101号B 洗面化粧室
- 12. 101号B 洗面化粧室
- 13. 101号B 洗面化粧室
- 14. 101号B 洗面化粧室
- 15. 101号B 洗面化粧室
- 16. 101号B 洗面化粧室
- 17. 101号B 洗面化粧室
- 18. 101号B 洗面化粧室
- 19. 101号B 洗面化粧室
- 20. 101号B 洗面化粧室
- 21. 101号B 洗面化粧室
- 22. 101号B 洗面化粧室
- 23. 101号B 洗面化粧室
- 24. 101号B 洗面化粧室
- 25. 101号B 洗面化粧室

第10図 9号地割面23号堅穴遺構平面・断面図

盤としたものは、推定底径10cm、高台の高さが1cmと高く、しっかりしたものである。図示した例は、高台の外側で1度ためをつくってたちあがるものである。見込みにには圈線がめぐる。

塗付：碗、皿が出土している。

碗は破片のみであるが蓮子型の碗が殆んどである。口縁外面に波頭文を描き胴部に蕉葉文を描くもの、梅月文、アラベスク文等が描かれている。他に深目の端反り碗で、外面に唐子を描き内面口縁に四方禪文を描くもの、外面口縁に1条、内面口縁に1条、見込み付近に3条圈線が描かれ、胴部内面に暗文の描かれるものなどがあ

る。皿は萹筒底の丸皿が殆んどある。外面に圈線と梵字？が描かれ内面見込みに「寿」字の圖案化されたものを描く。他に外面口縁に点描をし、胴部以下に鋸歯状の文様を描くと思われるものがある。丸皿で外面に草花を描くもの、端反りの獅子文を描く皿がある。又、見込みに唐子？山水を描き、高台裏に(大)明(年)造？の銘のある丸皿？がある。線描した上から濃染で塗付をするものである。

赤絵：碗が1点(3片)出土している。再加熱を受けているため発色等は不明である。

美濃：所謂灰釉と鉄釉の碗と皿が出土している。

灰釉碗 線刻で剣先形の蓮弁文を描くもの、簡略化して2-3ミリ間隔で刻線を垂下するもの、口縁下、胴部、胴下部に2条1単位の刻線が横環するもの等がある。剣先の中が1.2cmと広い例もある。

鉄釉皿 端反りをするものと丸皿がある。端反りする皿は口径11-11.5cm、底径5.8-6.6cm、器高2.4-2.9cmである。見込みに菊、かたばみ等の印花をおすものもある。高台裏には輪子痕が付着する。頸部が強くくびれて外反するものとゆるやかにするものがあり、器高も変化する。口径9.5cmと小形のものもある。丸皿は、口径9cm、10cmのものと10.5cm程で内面鐫削りの菊皿がある。他に裏皿が出土している。

鉄釉碗 口径12cm底径4.2cm器高7cmと丈高で高台が小さく頸部のくびれが少なく高台脇の削り巾が2mm以下と狭い輪高台の一群、頸部が強くくびれ、高台脇の削りが4mm以下で内反りの高台を有すると推される一群、器高が6cm程と推され、くびれがゆるやかで大きく、肩部に最大径の求められる一群等が出土している。前二者には胴下部

に鬼板が塗布される事が多いが、その前者はくすんだ赤味の発色が多いのに比し後者は銀色に輝く独特の光沢をもつものである。

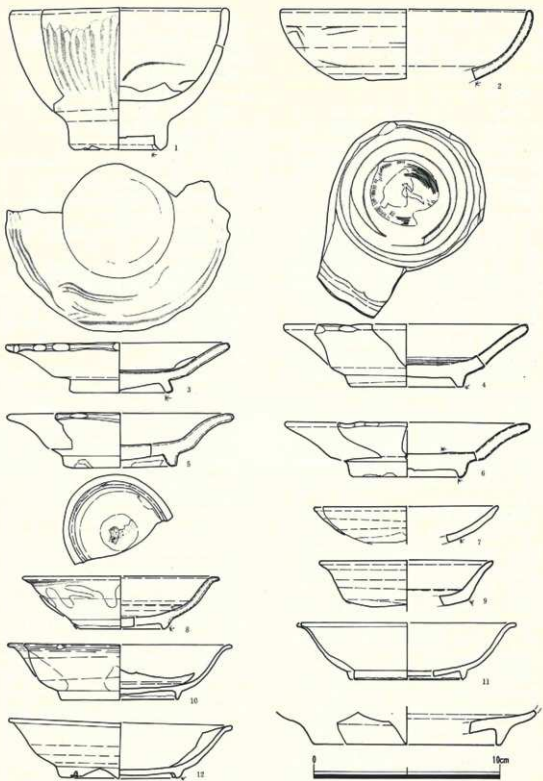
鉄釉皿 腰折の稜皿といわれる端反りの皿が出土している。内面全面施釉で外面口縁下1cm程以下は露胎である。腰部に段を有し高台は5mm余の畳付きを有する輪高台で見込みに目痕がある。黒褐色で、胎釉のものは出土していない。

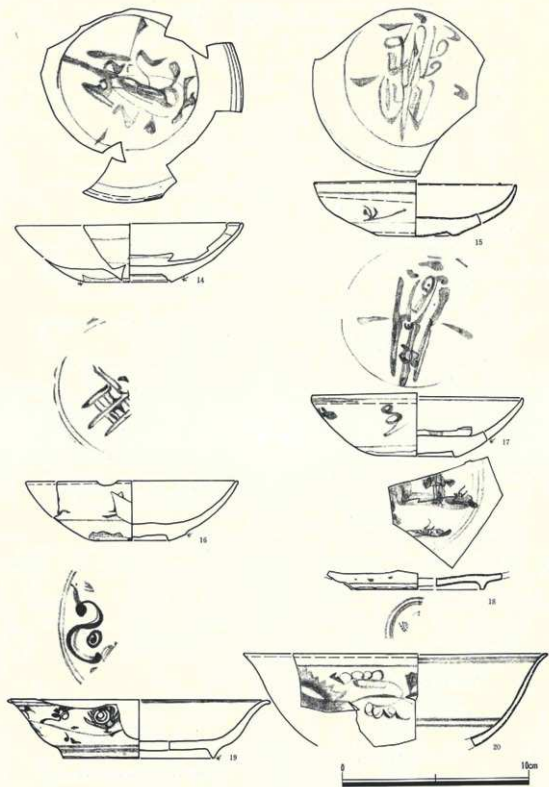
唐津：碗、皿が出土している。碗は推定口径6.5cm、同じく器高5.8cmで内がかえ気味に立ち上がる。高台畳付き以下は露胎である。釉調はくろい黄-グレイみの黄(8Y6.5, 5s, 3s)¹²である。底部はと巾状をなし、見込みにには圈線が1条めぐる。

その他：別表に示したように、越前系の播鉢、壺、珠洲系の播鉢、美濃系の播鉢及びこね鉢、唐津系の鉢などが出土している。これらについては都合で写真を掲載するだけに止めたが、後日改めて紹介することとしたい(松崎)。

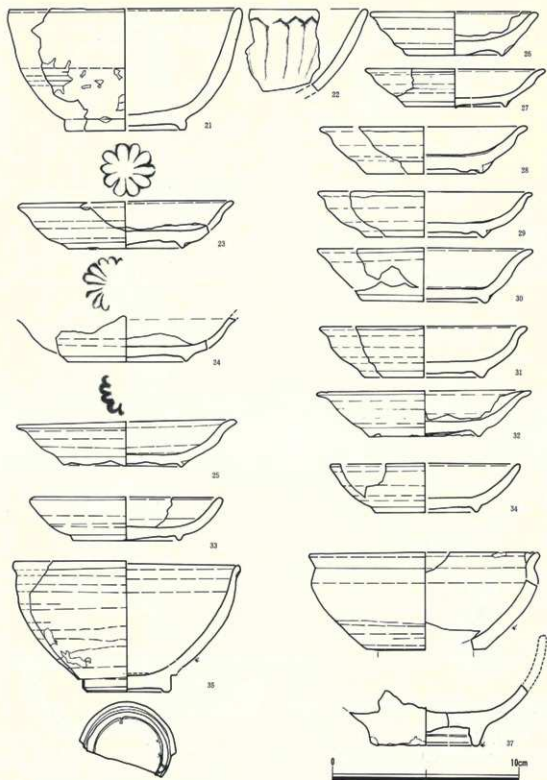
註 標準色彩図表A

b 鉄製品(第14図1-第15図23)出土総点数239点である。内訳は鍋55点、釘55点、小柄5点、鉢4点、鍔金具1点、鍔1点その他種類不明のもの89点であり代表的なものを図示した。1、3-5は釘である。1、3は頭部の折れ曲がる角度は約45°であり上向きとなる。ともに3寸釘である。尚1は本体内部が空洞である。4は1、3と違い頭部が本体に対して約90°であり先端は扁平となる。2寸釘である。5は頭部を欠損しているが全体の太さ等より2寸釘と考えられる。2はたがねと考えられるものである。頭部、先端部、側面を欠損する。極めて堅牢なつくりであり腐食もあまり進行していない。6は斧鉤である。極めて頑固な赤錆が多量に附着する。断面は基部及び中央屈曲部分は扁平な方形、先端部附近は不整形円形を呈する。7は平鍔である。先端部は中央背部分に比しやや薄い。8は小柄である。錆のため本体がやせており刃部の刃こぼれも著しい。9-12は鍋である。尚鍋の分類は口唇に対する口縁・胴部の傾き、形状、底部の形状等により分類した。尚詳細については1号-8号地割面出土鉄製品の項で述べている。また他の鉄製品の分類についても同様である。9は口唇部が口縁部に比し内外に強く張り出し内側に傾斜する。口縁部と胴部の境には外





第12図 9号地割面出土磁器・胎載品（染付・赤絵）



帯が走り胴部はやや屈曲するが口唇部を水平にして口縁部及び胴部とのなす角度は50°と殆んど同じである。器形は口縁、胴部が外に開く形となり、口縁部、胴部との明瞭な角度差が見られないこと等より吊耳鍋と考えられる。10は口唇部の内外への張り出しはない。小破片のため種類は不明である。尚器壁は他の鍋に比し薄い。11は吊耳鍋の耳部分であり耳下部凹線内中央に2孔がある。断面形によると口縁部が2孔及び凹線を覆うように強く外側に張り出している。12は口唇面はほぼ水平である。口縁部と胴部は屈曲する。口唇部を水平にして口縁部とのなす角度は75°、胴部とは90°でありほぼ直立した胴部となる。口縁部と胴部の明瞭なる角度差、胴部の直立化等より内耳鍋の可能性が高い。13は締め金具である。断面が方形を呈する環状のもので農工具の木柄部分にはめこむ。14-15は小札である。14は頸部に切りこみを入れる切付札で伊予札より幅が若干狭い。全体に反り気味である。15は3行の孔を有す三つ目札である。16はのみと考えられる。断面は基部-中央部は方形・先端は徐々に薄く扁平になりとがっている。18-23は鍋である。18は口唇部が若干内側に下がり気味となる。口縁部と胴部の境は表面ではあまり明瞭でないが内面では明瞭な屈曲部をもつ。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は60°、胴部とのなす角度は80°であり直径は33cmである。種類は不明。19は18と同様口唇部の内側が若干下がり気味となるが口縁部がやや外反し胴部にかけてはゆるやかな曲線を描き屈曲しない。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は77°、胴部とは75°であり明瞭な角度差はない。直径は約33cmである。種類は不明。21は18、19と同様口唇部が若干内側に下がり気味となる。口縁部はやや外反気味に曲線を描き胴部との境にて屈曲する。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は50°、胴部とは62°である。直径は約45.6cmであり大型である。種類は不明。20、22、23は底部-胴部にかけての屈曲部分である。20は底部直径約46cmと大型である。22は胴部との屈曲部分に2条の細い凹線がめぐむものである。底径約16cm、23は底径約24cmである。いずれも種類は不明。

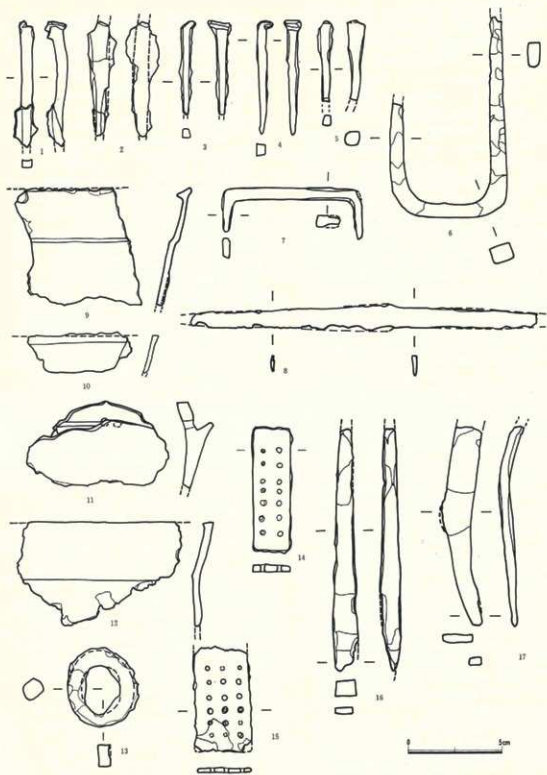
鉄製品の分布 (第16図) : 全体の傾向として地割面中央より東側にかけて多量に出土しており特に23J7区、23J18区の地割区画の溝部分及び

23J11区、23J12区の地割面中央部に集中するようである。23J7区については当地割面よりの廃棄、23J18区については7号地割面よりの廃棄が考えられる。23J11区、23J12区よりの出土は殆んどが23号竪穴遺構、32号竪穴遺構よりである。23号竪穴遺構は第10図SPD~D'セクションで見るとその覆土は埋め戻しの状態を呈するがロームブロック層が厚く堆積し整地作業を行なったようである。遺物はこのロームブロック層をはさんだ上下の層より出土する。ロームブロック層より下の覆土堆積状態は両壁面からの流れこみ等が多く自然埋没の様相を呈する。この事よりロームブロック層より下層から出土のものは床面出土がない事等より考えて廃棄されたものと考えられる。またロームブロック層より上の土層堆積状態はロームブロック層による整地後間層が入りすぐOs-aが堆積する。遺物はこの間層より出土する。このことよりロームブロック層より上の遺物は整地後、Os-aが堆積するまでの生活面より出土のものと考えられる。32号竪穴遺構は附図3SPF~F'セクションでみるようにその覆土はロームブロック層が2枚堆積し2回にわたる整地作業を行なったと考えられる。遺物は床面より出土のもの、1回目の整地層と床面の間より出土のもの、2回目の整地層より上で出土したものに分けられる。尚いづれの竪穴遺構より出土の遺物も鍋、釘であるが小破片のため、床面、覆土の上下による形態差は明確にできなかった(斎藤)。

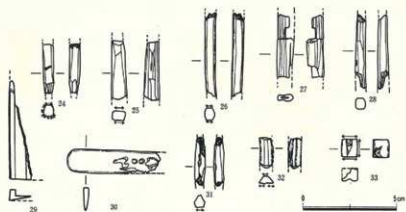
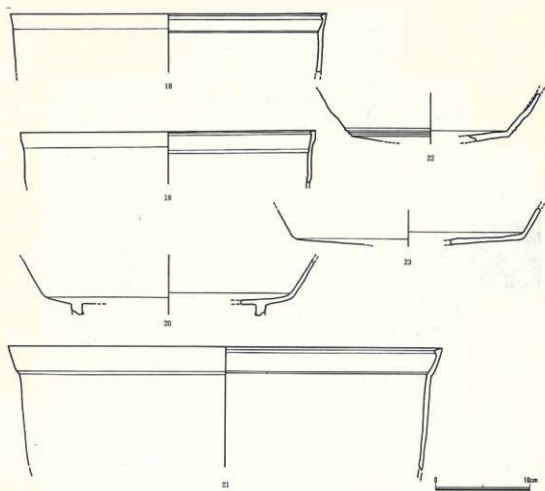
c 銅製品 (第15図30) 30は裝飾金具である。尚図示していないが銅銭が34点出土している。内訳は洪武通宝2点、永楽通宝2点、寛永通宝13点、ビタ銭5点、鉄銭1、不明鉄11点である(斎藤)。

d 骨角器 (第15図24-28、31-33) 24-28、31-32は中柄あるいは鏝である。いずれも先端部を欠損しておりその種別は不明。25、32は素材を縦に打ち割り整形を施したものである。24は基部に近い部分であり断面は多面形状となる。33は左上部を欠損しているが整形を上下、左右両側に施し立方体状を呈する。用途は不明である。

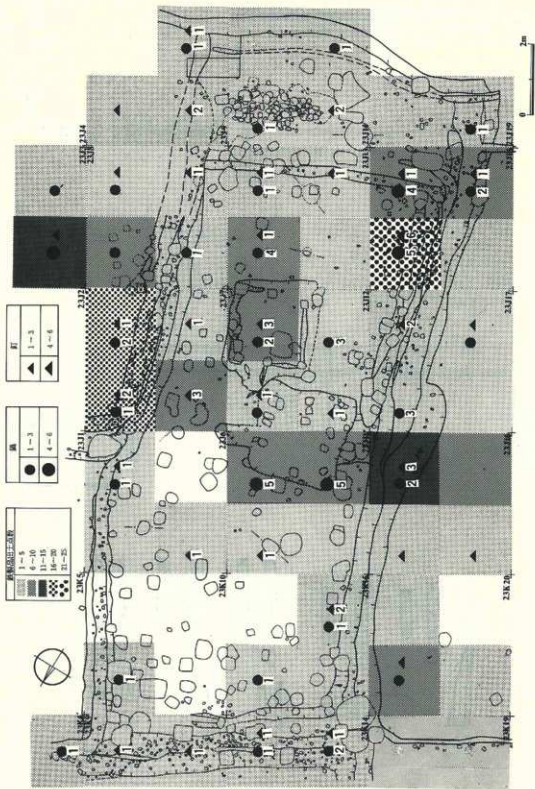
e 石製品 (第15図29) 29は硯である。図示していないがその他に砥石が29点、安山岩系の石質で平坦な使用面をもつ中型礫5点が出土している(斎藤)。



第14图 9号地割面出土铁製品



第15図 9号地割面出土鉄製品及び骨角器



(5) 小括

本地剖面の調査によってⅠ～Ⅳ期に変遷する溝遺構とそれと機を一にする掘立柱建物等跡（竪穴遺構を含めるとⅤ期？）の存在を推定し得、自然研究路の両側に建物跡が継続的に存在したことが判明した。又その期間中に竪穴遺構も併存するものであり、相互に重複関係をなすものであって、両者が年代的に前後関係をもって、区分されることはないことも明らかとなった。

本地剖面の北東部は華の沢に向けて傾斜を強くするの旧地形であり、これに対して二度に亘って盛り土による平坦面の確保、拡大を行っていることが推定されるにいたった。

その最初は第Ⅰ期とした溝の作られた時又はその直前であり、Ⅰ期溝の東側部分で行われている。

第Ⅰ期は掘立柱建物跡と竪穴遺構の二期に区分される。前期をⅠa、後期をⅠbとしたところである。この時盛り土面に炭化物の集積が行われる。5ブロックに分かれて検出されているが、ほぼ一体として良いものであろう。食料残滓のⅠ部が検出されているが強く火熱を受けた形跡がなく、火を用いた場所とは決め得ない。上部の集石も特別な構造を把握することはできなかった。次の盛り土整地の前段として石をつめる事も想定できるが、整地の為の石組の形跡はない。

西側にこの時期の建物と確定し得たものはない。各期の対応については既述したが或いは東面のⅠ～Ⅳ期と西面のⅡ～Ⅳ期、及び23号竪穴遺構（Ⅴ期）とが対応する4時期を示すとすべきかも知れない。

焼土と建物跡との対応も明らかでない。1～7のうち5例から魚骨等の小骨片が抽出され、炭化米、堅果等もみられる事は、炊事等の場を想定さ

せるものである。又、砂鉄？磁着する石粒、礫薄片、粒状の鉄滓？等については、その生成を検討する必要があるようである。鉄分については、この館内全域に広く成分として含有していることの有無が、又、鉄滓？としてきたものは、作業以外の過程では生じないものなのかということなどである。

魚骨等の出土は建物内部での炉址として使用されたことを示すものなのであろう。又土壌の覆土からも類似の成分が抽出されており、同様に屋内の貯蔵穴等とすべきであろうか。

2基の竪穴遺構は、掘立柱建物跡とあい前後するものであって両者の構築は時代差とするよりは用途の差とすべきと思われる。勝山館跡では、未確認も含め32基の竪穴遺構の存在が示されている。^註これらのうち数基の覆土、床面土壌サンプルを採集しているが、その成分分析等は殆んどされていない。60年度32号竪穴床面の炭化物の抽出で若干の資料を得はしたが、他の例や条件も合わせてこの遺構の用途について検討しなければならないと考ええる。

出土遺物と遺構との関係についてはまだ充分な整理が行われていない。陶磁器が示す年代は、白磁丸皿、珠洲系雷鉢等の15世紀後半以降のもの、美濃灰釉蓮弁文碗、鉄軸輪高台文高の碗等の16世紀初め以降のものから、唐津等の16世紀末葉に近いものまでの150年前後である。しかしこの間、各遺物が平均して検出されているのは勿論ない。他方本地割では掘跡の占める比率の高いものも目につくところである。更に検討を加える所存である。

(松崎)

註 史跡上之國勝山館跡Ⅴ

3. 第10号地割面の調査

(1) 調査目的及び調査

昭和57、58年度の調査によって、館神八幡宮跡周辺から集石、石列等が検出されたが、これらについては「比較的時期が新しいもの」とされ乍らも、尚、「建物遺構に関連する、石積の遺構が各所にあったことが想定され」ていた。¹²第10号地割面と8号地割面を劃す段に集石が認められた事、掘立柱建物跡の存在も予想される事等から、これらに関連する資料を得るべく調査を実施した。

第6号地割面から、第8号地割面に土層観察のために設定されている24K2～23K12東壁の延長23K7～23K2-1にセクションラインを設け調査を行った。

註 上之國勝山館跡V

(2) 遺構

a. 段・集石・溝

8号地割面と10号地割面には、100.3cmの段差があるが、これは盛土によって8号地割面を上げ、生じたものであって、盛土以前には、地山を切り下げた一段低い段のあった事が判明した。10号地割面の盛土下端と接する部分は、石積で固定しており、集石も盛土(段)の外側をおさえるのが初期の目的であったと思われる。¹³

盛土以前の段下部には小柱穴を伴う溝が設けられていたようであるが、一部の調査であり詳細はわからない。

10号地割面の北半は10～20cm程盛土層が部分的に残存しており、他の面と同様低い部分に盛土して面をつくっている。北端、次の地割面との境の段は40cm前後と低い。

西側寺の沢斜面層で小柱穴列を検出した。後に8号地割西端(23L)の調査で溝の中に小柱穴のある事が判り、この柱穴列も、調査時に見落しているが、溝に伴うものと推された。南西部でこれに直交する溝を検出したが、盛り土以前の溝につながるかどうか確かめ得ていない。東側自然研究路沿いに無数の小柱穴を伴う10cm程の浅い溝がある。東西約12m、南北6～7mの広さを有する。掘立柱建物跡及び竪穴遺構が検出された。

註 これについては、層序図によって明示しなければ無効なのであるが、8号地割面層序が未整理のため省略した。

b. 掘立柱建物跡

柱穴等の切り合いから4時期の建物跡を推定した。8号地割面の盛り土による段との関係は、前半2期を盛り土以前、後半2期を以後と推測した。これは段に伴う石と柱列との位置関係によったが、石は後世崩落して範囲が広がっていると思われるので確定はできない。

第I期掘立柱建物跡：本地割面で竪穴遺構が検出されているが、この柱穴P18がP17に切られていること、更に17の属する遺構と他の遺構(柱穴)との関係から、この33号竪穴をこの地割面で最古の遺構と推したが、この時東三分の二余の地割中で想定し得た遺構である。梁間3間×桁行3、4間の規模のようであるが、欠落が多く不明である。梁行481cm、桁行(894)cm。柱穴掘り方、痕跡は方形、柱間は154cm～246cm。柱穴の大きさは25cm×34cm、深さは19.5～66.9cmである。

この時、東西に溝が連なって南を劃し東、西の溝も基本的に完成していたと推される。

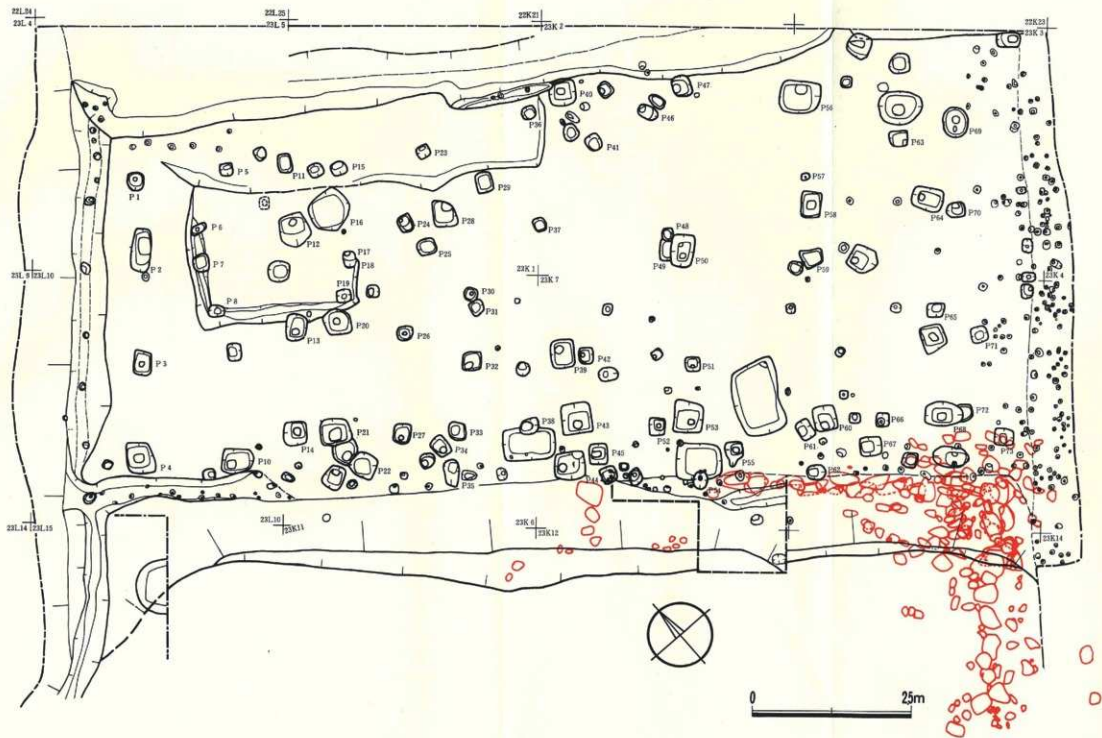
第II期掘立柱建物跡：地割面西側に寄って位置する。3間×6間、梁行455cm、桁行1077cm、柱間112cm～235cm、柱穴の大きさは48cm×45cm深さ17.6cm～75.2cmである。掘り方、痕跡とも方形。北側の1間の柱間寸法が特に短かく、庇とすべきかも知れない。P30、32によって東西に二分され西には3間×3間の一室がつらわれているようでもある。

第III期掘立柱建物跡：地割面中央に位置する。3間×6間の東西棟、梁行(430)cm、桁行(1055)cm、柱穴掘り方、痕跡とも方形。柱間は各100cm～170cm、115cm～230cm。柱穴の大きさは37cm×37cm、深さ14.1cm～81.1cmである。P48で3間×3間の1室と、小さく仕切られる4室の東西にわかれる。

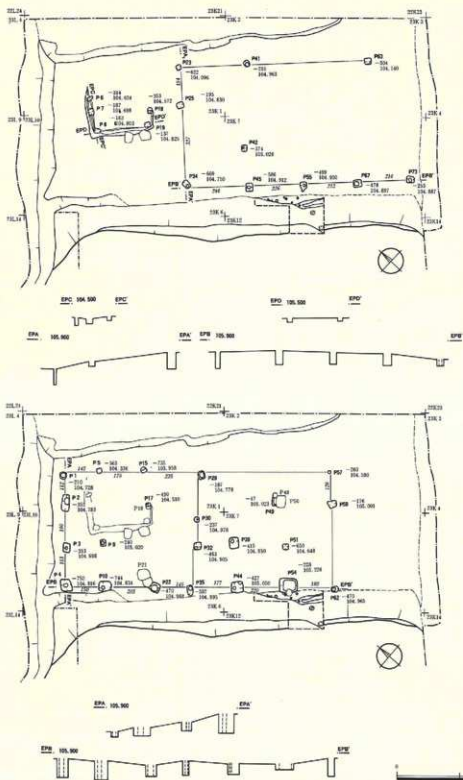
第IV期掘立柱建物跡：地割面中央に位置する。3間×4間の東西棟で東南に1間×2間の張り出しが付く。梁行(525)cm、桁行(964)cm、掘り方、痕跡とも方形、柱間約170cm～180cm、182cm～212cm。柱穴の大きさは42cm×50cm程、深さ15.8cm～75.6cmである。P50で東西に2分され、西は3間×3間の一室となる。

c. 竪穴遺構

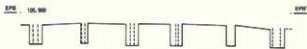
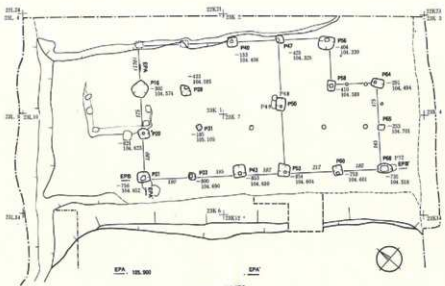
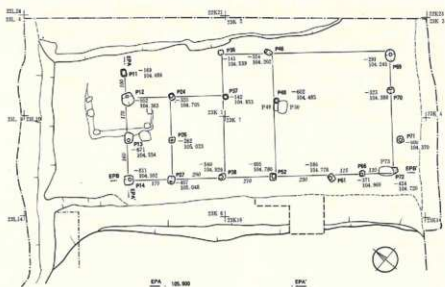
地割面西北で検出した。コの字型に壁を検出したが、北側は次の段(27号竪穴?)で削られ不明である。周溝が南・西に検出され、柱穴5個を認めた。58年の上面観察では東に出入口状の張り出



第17图 10号地新面柱穴配置图



第18图 10号地剖面建物跡想定图



しが表示されているが、²¹調査では確認出来なかった。P18はP17に切られている。東西2.60m×南北(2.35)m。南の壁高20cm。

註 上之国勝山館跡V附図1

(4) 出土遺物

58年の石積の調査、遺構上面確認時と今回の調査によって陶磁器、鉄、銅製品、石製品等が出土している。

(a) 陶磁器

本地剖面内から青磁、白磁、染付、朝鮮、美濃所謂灰釉、鉄釉、唐津、越前、信楽等が出土している。

青磁：碗・皿・香炉が出土している。

碗は破片で全体を知り得るものはないが、直口縁のものがみられる。1は外面に巾1.4cm程の蓮弁を刻線によって描くもので、口唇下1cm程の所から弧を描き口端に至って又下部へ垂下する。1枚ずつ描いていて丁度指先の輪郭が繰り返されているようである。器厚4mm、口唇の形態は丸味を有する角である。4mm間隔で刻線を重加し簡略化した蓮弁を描くもの、口唇直下に一条の凹線を表現するものがある。後者は轆轤整形時のあとが内

外面に沈線状に線描として生じている。

皿は稜花皿で、内面に2～3条1単位の波状文等が描かれる。高台、畳付以下、見込無軸の底部破片がある。高台径4.9cm。やや兜巾状に中央が厚くなる。見込みに2条凹線がめぐる。高台畳付きは平らに作られ、外面、5mm巾で整形痕が凹線状に残る。

香炉は第8号地剖面等出土のものと同じ個体となる三足を有するものである。

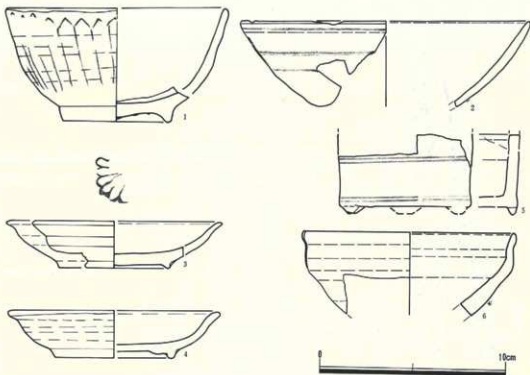
白磁：碗及び皿が出土している。

碗は内がかえ気味に立ち上がる低平な器形となるものの口縁破片である。器厚4mmと厚く、外面口縁に波状の刻線が描かれる。

皿は端反り口縁糸底のものと、揚底風の底部から、一気外反する2種がある。前者の方が多数を占める。一点高台畳付以下無軸の皿がある。畳付は面取がなされている。

染付：碗及び皿が出土している。

碗は、外面口縁に波頭文、胴部に蕉葉文、アラベスク文を、内面見込みに巻貝を描く、蓮子碗型のもので大部分である。高台畳付き、口唇部を角に成形する例が多い。他に見込みに鋸歯状に省略



第20図 10号地剖面出土陶器

した蓮弁を圏線の内側に廻らせる饅頭心と推されるものがある。外面口縁部に一条横線が走る程度で白色無文と思われる。又青磁釉を施されたものもある。

皿は端反り口縁付高台のもの、丸皿菴筒底のものである。端反りのものは、疊付きを角に面取する底径6.5cm前後と推されるもので、見込に草花等？を配するものと獅子文、十字花文を描くものである。菴筒底のものは、外面に算木文？を描くものと見込みに寿字文を描くと推されるものである。いずれも小片のため良くはわからない。

美濃灰釉：碗、皿、香炉が出土している。

碗は外面に刻線で剣先形の蓮弁を表わす丸碗と横線を廻らす平碗である。20図1は高台ウラの釉溜りが疊付きの下位になり水平にならない。見込から体部の1部に擦痕がある。蓮弁碗、平碗各2無文の丸碗胴部片1の5個体を認めた。

皿は端反りする付け高台のもの、腰折れ、削り出し高台、体部以下無釉のものがある。端反りの皿には大小、反りの強弱等がみられる。腰折れの皿は概観ⅣでIとしたものに近いが、後述のよ

うにやや後出のものと推される。

香炉2個体分の破片がある。図示したものは8号地割面のもので接合しており流入の可能性が有る。底部と胴部に2条1単位の横線が廻る。内面現存の上部、一部は無釉である(第20図)。

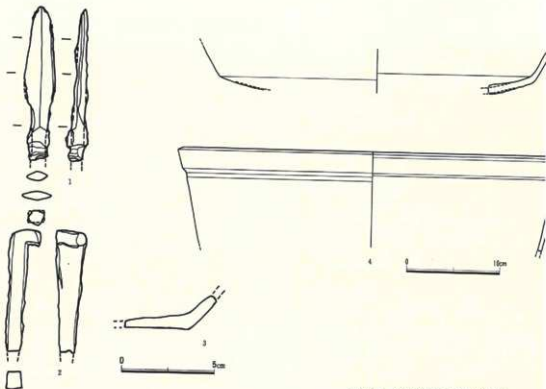
美濃鉄釉：碗及び不明のものである。図示したものは、頸部がほぼ直立し、強く屈曲して底にいたるものである。釉調はくらい赤味のだいたい。他に口唇が湾くつくられ、くびれの殆んどないもの、頸部にくびれの強いものなどがある(第20図)。

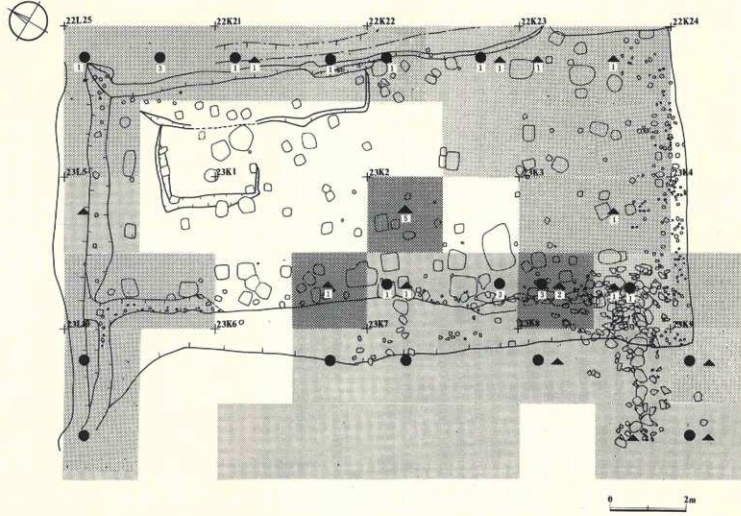
唐津：器種不明のものである。底径5.4cm、疊付巾8mmの輪高台の皿と思われるもの見込みに径5.5cmの丸筒状のものが軸葉で接着されている。^註この筒状のものは欠失しており全容がわからない。器台のようなものであろうか。他に内面下部に段を有する皿が出土している。

朝鮮：鼓き締めめの袋物が3個体分出土している。広範囲に散布しており出土地点の特定ができない。

越前：摺鉢、壺が出土している。壺は胴部破片であるが、口縁部寄りの方を磨ってある(松崎)。

註 鈴田由起夫氏にご教示を戴いた。





。b 鉄製品(第21図1~4) 出土総点数54点である。内訳は鍋20点、釘17点、小札2点、鏝1点、小柄1点や、用途不明5点である。1は柳葉型の鏝である。先端部は若干丸味を帯びるが、左右両エッジ部分は刃部を作出する。2は釘である。極めて堅牢な作りであり重い。先端部分を欠損しているが3寸以上の大きさと考えられる。3~4は鍋である。3は胴部から底部への屈曲部分である。底径約33cm。4は口唇部が口縁部に比しやや内側に張り出し外側にやや傾斜する。口縁部と胴部の境には外帯が走り胴部は屈曲する。口唇面を水平にして口縁部となす角度は93°、胴部とは98°といずれも鈍角になる。種類は不明。

鉄製品分布(第22図)：当地剖面を区画する溝の覆土及び23K 8区集石地区で多量に出土する傾向がある。地剖面中央部では殆んど出土しない。当地剖面よりの出土量は23J区に比し約1/2と極めて少なく鉄の消費の極めて少ない地域か建物移転あるいは当地剖面を使用しなくなった際すべてを持ち去ったことも考えられる。

銅製品：斧1点、容器破片4点、その他洪武通宝4点、寛永通宝2点等計30点の出土があった(齊藤)。

(6) 小括

本地剖面の調査によって、8号地剖面は、盛り土の前後に大きく2分できること、又この盛り土の時、石を積んで強化補強していることが判った。その形成年代についてはOs-a火灰炭が指標となるものであるが、その堆積を明瞭に把える事は出

来ず比較的短時間の形成を思わせている。

東側は小柱穴の密集する浅い溝が割し、西側は斜面肩に溝が掘られ、小柱穴が間隔を於て1列並んでいる。

10号地剖面に於ける建物跡は、8号地剖面の盛土部分の形成と関連しており、その前後に二分すべきと考えられる。柱穴の切り合い等から4時期を想定した。

掘立柱建物跡には、3間×3間の一室を基調として認めることができるようである。

出土遺物の中では播鉢の全体に占める割合が1割弱と少ないのが特徴である。青磁碗には15世紀代のものが認められている。香炉も15世紀のものであるが、これは8号地剖面出土のもの等と接合している。白磁、染付は16世紀代のものである。美濃の製品も16世紀の初頭以降のものである。唐津焼の出土は16世紀末葉の年代を示すものである。

これらのことから、この10号地剖面の形成・使用年代は、15世紀末~16世紀初から16世紀末の間とすることができる。又、地剖面を拡張する為の盛土・石積の時期も、ほぼこの時期の事として大きな誤りはないことであろう。

播鉢の出土比率が少ない事、茶臼が出土している事等、遺物の内容に特色が見られるのであるが、前段(8号地剖面)からの流入も相当みられるようであり、個々の遺物の帰属を決定する作業を終った後に、建物跡との関連も併せて本地剖面の性格について再考してみたい。(松崎)

4. 第8号地割面西端の調査

(1) 調査目的

昭和58年度の調査によって、本地割面から新旧2時期の溝遺構(冊列)3基?の竪穴遺構と掘立柱の建物跡?が、又、溝遺構部分には集石が検出されていた。更にこの調査区の西端は未調査区として残され溝遺構等の更に延びる事が推測されていた(上之國勝山館跡V)。

これらの事から竪穴遺構と掘立柱建物等の関係及びこれら“中世”遺構と集石遺構の関係、及び西端寺ノ沢斜面跡の遺構等が、残された問題であった。又、青磁香炉が出土する等、遺物の面に於ても、本地割面には重要な要素が看取された。

この為、本年度は、本地割面西端の未調査区を先ず調査し、これらの問題を多少なりとも解決することを目指した(松崎)。

(2) 層序SPN~SPN'(第23図)

8号地割面西端部、6号地割面と8号地割面を区画する段及び集石のセクションである。2本の段の新旧関係、集石の時期等を明確にすることを目的とした。平面図との位置関係より見るとSPN'より北は6号地割面、中央部よりSPN側は8号地割面となる。図上Aは柱穴、B・Cは地割を区画する段、D、E、Fは柱穴である。A~Dの新旧関係及び集石の新旧関係はまずCの段が作られる。その覆土10は基盤質微小礫を若干含むやや粗の状態であり埋め戻しの後面を作らず単に土をかぶせただけと思われる。またCの段覆土上面にある6と、Dの柱穴覆土上面にある8、9とは殆んど同質の土であることよりCの段とDの柱穴が埋没、廃棄後はほぼ同時期に堆積したと考えられ、Dの柱穴はCの段と同時期と考えられる。その後Cの段覆土を切ってBの段が作られる。その覆土5は、基盤質微小礫を20%含む密な状態であり使用後埋め戻しを行ないつぎ固めたと考えられる。その後Bの段、Cの段覆土の上に石が積まれ、それとはほぼ同時に7のロームブロック層を盛土している。集石の性格は平面観察によるとB・Cの段とはその幅、方向性は異なるが一定の幅・方向性をもっていること、7のロームブロック盛土層により補強していること、地割面と地割面の境に位置すること等より人為的に作られたものであり、地割を区画する施設であると考えられる。この結果二つの段とに集石により地割、区画が行なわれ

ており、少なくとも当地割面には3時期の区画された掘立柱建物跡があったことが考えられる。またAの柱穴はBの段覆土を切っておりBの段より新しい時期と考えられるが、集石の下の3によりその覆土が切られており時期は不明である(斎藤)。

(3) 遺構

a 段、集石、溝

本地割面の南は60~70cmの段差があり、その高い面を6号地割面としている。層序の項でも述べているがこの段は、石を積み、更に粘質土をつき固めてつくっている。が、この石積の下位には2条の溝遺構があり、元来は地山を削り、溝を掘って段がつくられていたものである。より南側にある巾50cm程の溝の方が新しく、70cm程の中のある北側の溝が古い。新しい方の溝は調査区内で70cm程西にのびて閉じている。古い方の溝は寺ノ沢斜面付近で北へびて消失する。この溝は粘質土で埋まっておりその上に焼土・炭化物が集積し、更に上位に集石がある。

寺ノ沢斜面肩には40cm程の溝が掘られ、内部には、小柱穴が間を置いて1列みられる。この溝は、南の10号、北の6号にも続くものと思われ、西・寺ノ沢斜面共通の施設であると考えられる。

この溝の内側に小柱穴が更に1列あり、時期差があると推している。

b 掘立柱建物跡

調査区内から掘立柱柱穴が検出されたが、58年度調査で検出の柱穴との関係把握も不十分で詳細は述べられない。古い方の溝が北へまがる角で、埋められた粘質土層の下位から100×85cmの掘り方で、32×32cm程の角柱の痕跡を有する柱穴が検出された。勝山館跡の柱穴としては大形のものである。この種の大形柱穴は第9号地割面南西隅、その南、未命名の地割面南西隅(23J1区)等でも検出されているところからは、地割の隅に必要な大形柱穴とも推測される。が、この柱穴が、本地割面の下位で検出された事からは、未検出の初期遺構の一部とも推測される。調査区北半で本地割面の盛土部下位から、大きな浅い穴が検出されたが関連するものであろうか。

c 焼土、炭化物

調査区内で焼土2カ所、炭化物集積1カ所を検出した。いずれも特定の遺構との関係は明らかでない。

焼土1は古い溝の南西隅に位置し、炭化物集積よりは下位で大形の柱穴よりは上位である。20×25cm程の大きさで、この周囲90×110cm程の範囲に炭化物が集積している。

焼土2は調査区東に位置し周辺の遺構確認より上位で検出された。40×60cm程の範囲である。

焼土1から抽出し得た成分は粒径3mm以下の磁着する石粒及び砂鉄? 8mm以下の磁着する礫切片、径3mm以下を中心とする空洞化した磁着しない鉄滓? (5-6mmの粒のものが樹枝状に付着したものや棒状のものもある)。木炭、2×4mmの炭化物(米)、1×2mm程の粟粒状の炭化種子、3×4mmのソバ? 状のもの、粉食物状の炭化物である。

又、この周辺炭化物集積部分中から抽出できたものは、上記の他に、堅果、繊維束、魚骨等である。全体に炭化物集積部分の方の量かはるかに多いが、鉄滓? としたものは、小粒径の他に2×5cm、2.5×3.5cmといった大きな塊をなすものが見られた。

焼土2から抽出したものは、砂鉄?、1mm以下の磁着する砂粒、小骨片、及び木炭である。

(4) 出土遺物

a 陶磁器

舶載品は青磁、白磁、染付、国産品は、美濃・灰釉、鉄釉(瀬戸?)、唐津、越前、信楽等が出土している(第24図)。

青磁: 碗、皿、盤が出土している。

碗は刻線で省略した蓮弁を描くもの2個体分、図示した例は口径13cm余、やや斜めに刻線を垂下させ、頂部に円弧を連続させている。

皿は桜花皿の口縁部破片である。

盤は広範囲の分布を示す内面に寛影りで牡丹の文様を描くものの一部である。

白磁: 端反りの皿と高台から外反する皿が出土している。端反りの皿には口径5.5cmとやや小型のものがある。頸部のくびれに凹線が1条刻され、口唇が角につくられている。

染付: 碗、皿が出土している。

碗は外面口縁部に2条1組の團縁の間に波頭文? の省略を描き、体部にアラバスク文を配する蓮子碗である。見込みには巻貝が描かれる。

皿は端反り皿、及び唇筒底の丸皿である。

美濃灰釉: 碗と皿が出土している。

碗は線刻で蓮弁を描くものの破片である。

皿は端反り皿と丸皿が出土している。端反り皿には小型のものがある。図示したものは口径9.5、底径5、高さ2.5cmで見込みに菊の印花がある。丸皿には、内面に錆の入る、“菊皿”とされるものもある。

美濃鉄釉: 天目茶碗と香炉が出土している。

24図3は口径12.5cm、現在高5.5cm程のもので、下部は鬼板を塗っている。口唇部はやや厚いが鋭角になっている。同4は口径11cm、底径4.2cm、高さ5.5cmで下部には鬼板が塗られる。内反り高台で、高台脇の削り巾は6mmと広い。口唇部は丸味があり頸部1cm程が直立する。他に同様の内反り高台でウラに朱で矢印様の記号の書かれたものがある。高台径4.5cm、高台脇の削り巾5mmである。又底径4cm弱の輪高台の破片がある。高台脇の削りは2mm以下で場所によっては沈線のみとなっている。軸調は黒く下部は露胎である。色はグレイ-青味のグレイ(5.5-6.5)である。

香炉は口径7.5cm、底径3.5cm、高さ2.5cm弱のものである。口縁が強く外に折れ、やや内傾気味の8mm程の頸部から肩にいたり底部となる。底部に糸切痕が残る、小さな粘土塊を張りつけた三足がわきに付く。内側は頸部半ばまで、外面は胴部まで鉄釉がかけられる。内側見込みに反時計回りの成形? 痕がある。袴腰の香炉の低平化したもので皿状を呈している。この種香炉の低平化は、美濃においては古瀬戸系施釉陶器の第IV期以降のこと^註とされている。本例が美濃か瀬戸かは明らかになし得ないが、概その年代を知る事はできると思われる。

その他としたものは袋物か広口の壺の破片と思われるものである。

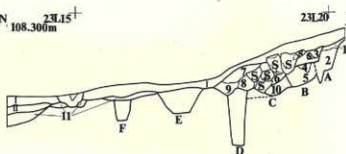
唐津: 碗、盤が出土している。

碗は南側の6号地割面出土のものと同接する浅い碗の小片体である。胴下部が露胎となるものである。

盤は、内径30cm程と推されるもので口縁が強く外反して段を有する。今一は、口径20cm前後と推される波状縁の盤である。器厚4mm程の薄作りである。内面胴下部に1段を有する。外面胴下部まで施釉され、以下露胎となるようである。

その他: 信楽の広く分布する同一個体の壺の破片、越前の播鉢5個体分と鉢又は壺が出土している。播鉢は丸味を持った、口縁の内側に凹線を1

PN 23L15⁺
108.300m



1. 7.5YR5/6明褐色、中々粗
2. 10YR2/4.7.5.1黄褐色、基盤質礫小礫含有、密
3. 10YR2/4暗褐色、中々粗
4. 10YR2/4.2.3.1黄褐色、炭化物微量含有中々粗
5. 10YR2/6黄褐色、基盤質礫小礫20%、炭化物含有、密
6. 10YR2/4暗褐色、基盤質礫小礫20%含有、中々粗
7. 10YR2/3黄褐色、ロームブロック層基盤質礫小礫10%含有、密
8. 10YR2/4暗褐色、基盤質礫小礫20%含有、中々粗
9. 10YR2/2黄褐色、基盤質礫小礫20%含有、中々粗
10. 10YR4/4暗褐色、基盤質礫小礫7%、炭化物含有、中々粗
11. 10YR4/4暗褐色、基盤質礫小礫含有

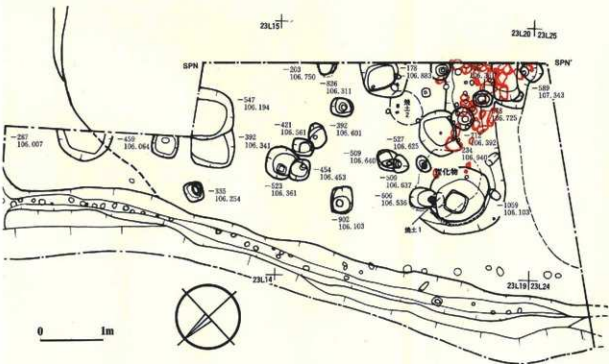
I層 10YR4/4暗褐色、密

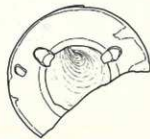
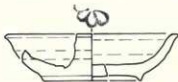
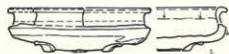
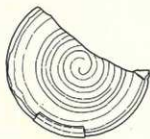
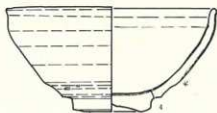
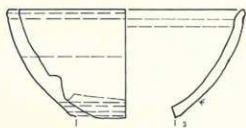
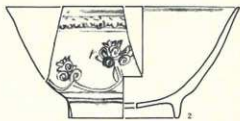
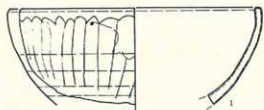
II層 10YR2/9黄褐色

23L15⁺

23L20 | 23L25

SPN





第24图 8号地剖面出土陶磁器

条廻らすもの、軽く内そぎして口端を作り出し、その下に 8mm 程の段を有するものがある。卸し目は 8 条及び 9 条 1 単位でその間隔は広い。他に胴部上半から卸し目の密になるものもある。

鉢又は壺は口縁側がすられて平滑になっている(松崎)。

註 井上喜久夫 1977 世界陶磁全集 3 日本中世

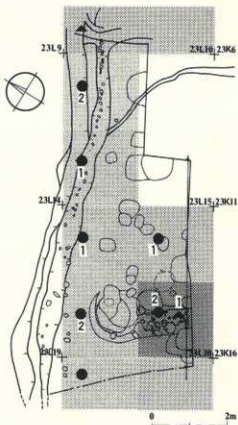
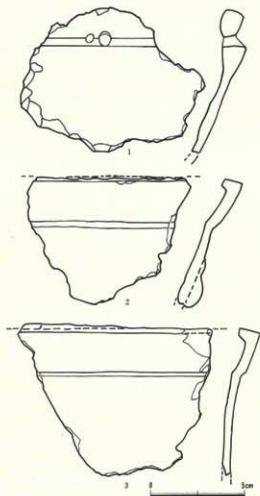
b 鉄製品 (第25図 1~3)

出土総点数18点である。内訳は鍋9点、釘2点、用途不明5点である。1~3は鍋である。1は吊耳鍋耳部分である。吊耳下部凹縁内に大ききの違う2孔がある。尚これは9号地割面出土第14図11

と異なり口縁部は2孔を覆うように強く張り出さない。2は口唇部内側がやや張り出し口縁部と胴部の境は外帯が走り屈曲する。また口唇面を水平にして口縁部のなす角度は70°、胴部とのなす角度は85°となる。これらの断面形態、角度等より内耳鍋の可能性が強い。3は口唇面が水平とはならずやや外側が下がり気味となる。口唇面内側は2と同様やや張り出す。また胴部はやや外反する傾向を示す。口唇面を水平にして口縁とのなす角度は90°、胴部とのなす角度は鈍角となる。断面形態等より内耳鍋の可能性が強い。

銅製品:寛永通宝2点、不明銭2、ビタ銭1が出土している。

鉄製品分布:(第25図)。地割面西側溝附近に出土量が多い。他の地区に比し鍋の出土率が極めて高い。その他にスラッグも若干出土し炭化物集積箇所と何らかの関係が考えられる(齊藤)。



(5) 小括

調査の結果、昭和58年の調査で検出されている溝、段、集石等は本調査区迄続いている事が明らかとなった。

溝は2条が検出されたが、より南側の溝は僅かにのびて来ているだけであり、溝内の小柱穴も1個しか検出できなかった。58年の調査では溝が3条検出され、東半部の2条については前後関係が示されたが本調査区寄りについては明らかでなかった。本年度の調査でもこの点の詰めが不足し、これらのどれに連続するかは確定出来なかった。他の1条も、過年度の調査では、途中迄より検出出来ず、本調査区側からの追求が不足した。

段及び集石はほぼ58年度検出の遺構に連続する。石を積み更にロームブロック等の土をもって堅めているが、勝山館跡の調査で近世遺構の確認の鍵屋にしているOs-a火山灰の堆積を認める事ができず、その時期について決定できなかった。

本地剖面の北部は石積みと盛り土によって拡張されているが、南側は溝を南側に移すことにより上の段(6号地剖面)を狭める形で拡張している可能性が認められたが、これについては、58年度調査結果を再検討し、併せて再考したい。

西端寺ノ沢斜面肩には溝が掘られ小柱穴が1列、

間をおいて立つ。柵列又は塼と推される。柱と柱の間には葦、萱類がたてられたのであろうか。

調査区北半で、盛り土下位から穴を検出し、南西隅でも粘土層を張った下位で柱穴を検出した。より古い時代の遺構の存在を示唆するとも思われ、本地剖面等での確認遺構が、南側の盛り土の少ない、地山面の高い部分に片寄る傾向も又再考しなければならない。

掘立柱建物跡は58年度検出のものとの関係を明らかにし得なかった。立木等で掘り残した部分も障害となっている。

竪穴遺構と掘立柱建物跡の関係は資料の整理中であるが、後日明らかにしたい。

本調査区出土遺物には青磁盤、鉄軸香炉等の15世紀代の所産のものから16世紀末葉の唐津焼まで年代巾がある。地剖面全体の遺物組成、出土状態等を併せてこの地区の性格を捉えなければならないが、陶磁器からおよその年代観は得る事ができた。

碗、皿等の汁器、仏具(香炉)の出土は生活の場を想定させるものであるが、播鉢の出土、焼土、炭化物の集積とその中から食料、残滓等が検出された事は、日常的居住空間である可能性が高いといえよう。(松崎)

5. 第1～第10号地割面の概要

昭和54年に門跡柱穴の検出を見てから、57年館神八幡宮跡、58年同及びその北面の段へ調査を拡張、60年にいたりおよそ東西30m×南北40mの範囲の大部分の調査を行った。未だ整理の途中であるが、ここにその概要を述べることにした。

(1) 遺構

この調査区は大きく四種の遺構から成り立っている。それは南西部の土塁、門跡及び両側の櫓列等の館後方の防禦、及び通路に関するもの、館神八幡宮跡、そしてその北に階段状に平坦部を作り出して形成される建物跡、及びその敷地である。

建物跡の検出される階段状平坦部がほぼ中央を通る自然研究路(通路)の左右(便宜的に西・東とした。)にわかれて付していることから、これらを南から交互に番号を付し、各々を地割面と仮称した(Ⅰ調査の概要)。

1は土塁及び頂部櫓列、中央の門跡等である。土塁の外(南)には空堀が切られ、門跡から下って堀を渡る橋が架けられる。

土塁は自然の丘を削り出して作っており、門の西側に顕著である。西側の土塁は西半及び南に面してL字形をなし、北半にはない。門東側の土塁の本来の高さは明らかでない。櫓列側の溝の掘り込みからは現状より若干高い程度と推測される。

土塁外側に小柱穴が一条走り、小さなステップがある。犬走りか或いは、簡単な櫓列が、外側に1条作られていたのであろうか。

門は、橋、柱跡の位置から210cmの巾が推定される。柱は長方形の角柱である。

2は通路西側、土塁内側の平坦部である。江戸時代の社跡の礎石が検出された。

3はその東に対する地区である。石積みの階段がある。この階段の性格は年代も含めて良く解らない。階段の高幅で竪穴状の遺構が一部検出されており、初期遺構面が下位にあると推される。

4は礎石建社跡の南で、江戸時代後半(1741年)以降に盛り土をした土堤までの間である。竪立柱の建物跡が検出されているが、初期社跡を示す遺構が推された。

5～10の地割面は6～12m×12～22mの長方形の平坦面を階段上につくり出し、竪立柱建物跡と竪穴遺構が設けられる通常の地割面である。只、7号地割面では、明確な遺構が検出されていない。

各地割面は溝で三方が囲まれ、溝の中には小柱穴に不規則に並ぶ例が多い。東西の沢に面する斜面肩には粗い溝が掘られ、柱穴が間をおいてみられる。

各地割の遺構は3～4回建て替えが行われている。

(2) 遺物

本年度迄の調査で陶磁器、鉄・銅製品、骨角器、石製品、自然遺物(獣骨・炭化米・木炭地)等が出土しているが、層位や位置の帰属、遺物個々等については整理不十分である。陶磁器と鉄製品の概要を述べる。

a 陶磁器

青磁、白磁、染付、(中国)、朝鮮製の舶載品と、美濃、越前、唐津、珠洲、信楽等の国産品がある。青磁:碗、皿、盤、香炉が出土している。

碗は刻線による省略した蓮弁を描くものと外面に雷文のくずれた波状文等を描く低平な碗が残っている。遺物廃棄場所が出土した端反りの碗はないようである。寛影形の蓮弁を持つものが60年度の調査で出土した。刻線蓮弁文の碗には器高が6.5cmのものと7.5cmの二者がある。刻線の間隔が上部で1cmと広いものもある。口縁に1条横線が廻るだけの無文のものもみられる。

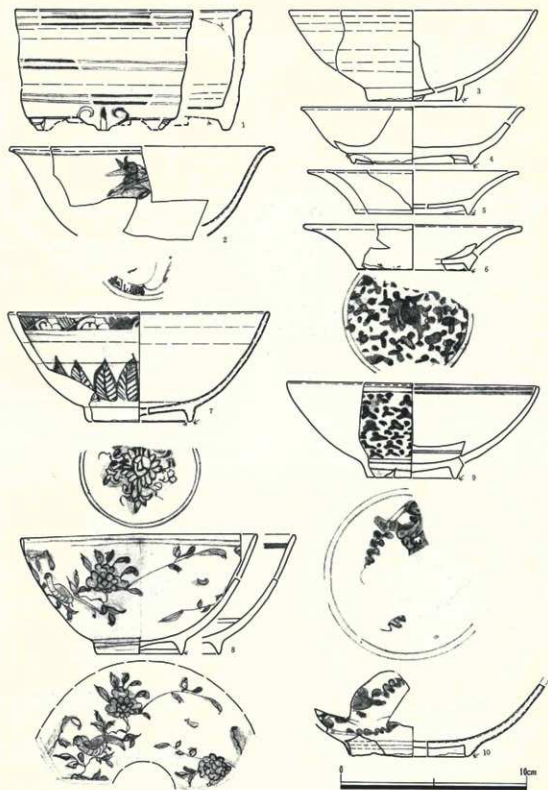
皿は稜花皿である。底径6.5、5.5、5.0m等のものがある。高台裏無輪のものや蛇の目に拭うものがある。見込みに印花のおされるものと無輪のものがある。丸皿はみられない。

鉢は口径26cm程、口縁が端折して溝縁状になる。内面体部に牡丹を寛影形で描く。高台皿付き、ウラにも施軸される。高台内側は角に削られている。(PL. 6、59、概観Ⅳ)

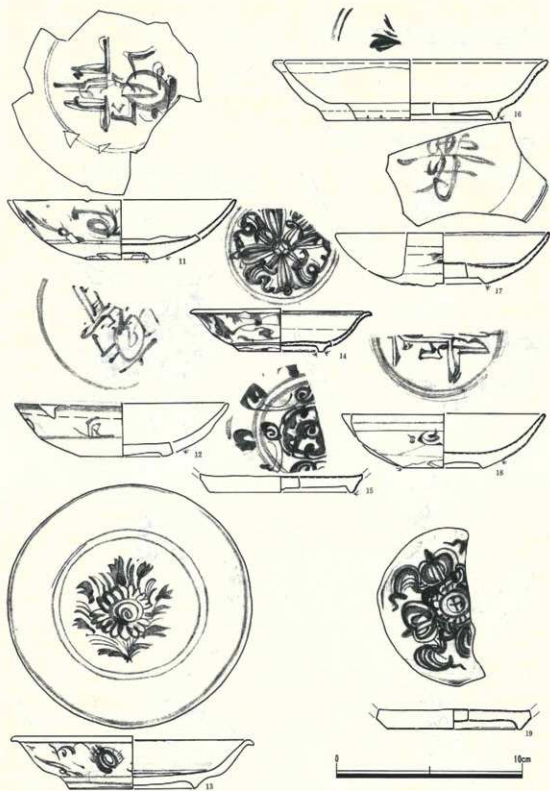
香炉は三足の筒型香炉である。口縁、胴、腰部が肥厚し竹節の模した形となっている。内抱え気味に立ち上がり、肥厚する口縁の内側が削られて段を有する。軸が厚くかけられ、口唇が内削ぎ状になる。内面は成形の削り痕が顕著に残る。外面肥厚部には2条1単位の横線が廻る。脚には如意頭が割される。出底に作られているが少しもちである(26図1概観Ⅴ)

白磁:碗、皿、盤?環が出土している。

碗は見込みが高台盤より下がる蓮子型のもの、省略した蓮弁を刻線で描く低平な碗である。小破片であるが口縁のつばまる丈高の器形と推される



第26图 陶器 (青磁·白磁·染付)



ものもある。

皿は丸皿と端反りの皿である。

丸皿は削り出し切り高台の小皿で陶質の、体部下半以下露胎となると推されるものと硬質全面施釉のものがある。

22~23の小さな弁をもつ口径7.5、底径2.8cm、器高2.1cm程の輪花皿がある。高台は削り出し糸底で高台内ある。見込みは蛇の目に拭われる。外面口縁下に1条凹線が廻り、以下放射線状に刻線が施される。見込み蛇の目部分、高台内に赤褐色の付着物あり紅皿かと推される。

端反りの皿は糸底で腰の張るものと揚底で一気外反するものである。量は前者の方が多く、器高3cm前後のもの2.5cm以下のもの少数がある。

盤？は小破片であるが、高台が高く、畳付きが角に面取りされ、高台脇にためのあるものである。杯は口径6cm程の破片である。揚底で一気反る器形と推される。

染付：碗と皿、盤が出土している。

碗は端反り口縁、蓮子型、口縁のつばまる丈高機頭心？のものが出土している（第26図）。

端反りのものは4個体分あるが図示した飛馬文以外は破片の為、文様は不明である。尚概観Ⅳでこの破片を飛雲と誤記したので訂正したい。

蓮子型の碗は、口唇、高台が角に面取りされたものと、薄く作り出され、糸底を呈するものがある。前者は6cm程の器高であるが後者は5cmと低平になる。文様は前者は外面波頭文帯と蕨葉文又は、アラバスク文であるが、後者は更に梅月文、唐草文、追い羽根状の文様帯が描かれる。

同図8は径が3.5cmと他より小さく、6.5cmと丈高のものである。畳付きは角に面取りされるが、高台ウラは兜巾状になり、文様も濃染によっている等他との差異が多い。

高台丈が1.3cmと高いアラバスク文を描くものがある。高台脇にためがあり、腰の張った角型の碗かと推されるが、勝山館では蓮子型より薄手であるのが一般的であるのに本例は5mm弱と厚い。

機頭心型かと推されるのは口縁内外に1条の圈線を有するもので、外面は圈線以下に白磁釉が、圈線上及び内面に染付釉のかけられるものである。口径12cm弱と推される。

皿は端反り口縁付高台糸底のものと直口縁糸底のもの及び葶筒底のものである（第27図）。

端反りのものは、見込みに草花文を描くもの十字花文を描くもの、獅子文を描くものがある。それぞれに大小があり、器厚の厚いものと薄いものがある。厚手のものには畳付きを面取りするものもある。19は精緻な文様で羯磨を図案化している勝山館跡では例数の少ないものである。13は口径13cm×底径6.5cm程の薄手の皿で、見込みに菊花？を描いている。

直口縁糸底の皿は、内面口縁下に簡略化した四方薄文、外面には瑞果？が描かれる。

葶筒底のものは、外面梵字？内面見込みに寿字文を描くものが殆んどで、外面蕨葉文を鋸歯状に描き見込みに捻花を描くものもある。

赤絵：碗の破片が2点出土している。

美濃灰釉：碗、皿、袋物が出土している（第29図）。

碗は丸碗と平碗で、丸碗は刻線で剣先形の蓮弁をあらわすものと無文のものがある。平碗は1例であるが口唇が薄く作られ透明感の強い釉が施されている。

皿は、端反りのものと直口縁のものがある。端反りのものには、外面胎部以下露胎で削り出しの輪高台を有する腰折皿・稜皿等とされる類、削り出し揚底のもの、付高台糸底のものがある。腰折皿は体部の屈曲が弱く、高台が低く削り出され、畳付きが丸味を持つ等の特徴がある。付高台の皿は口径が11~12cmのもの8.5~10cmのものがある。11~12cmのものには腰の張る丈高のものと腰のない低平なものがある。8.5~10cmのものには菊の他に酢漿草・橘等の印花がみられる。（29図35~37）

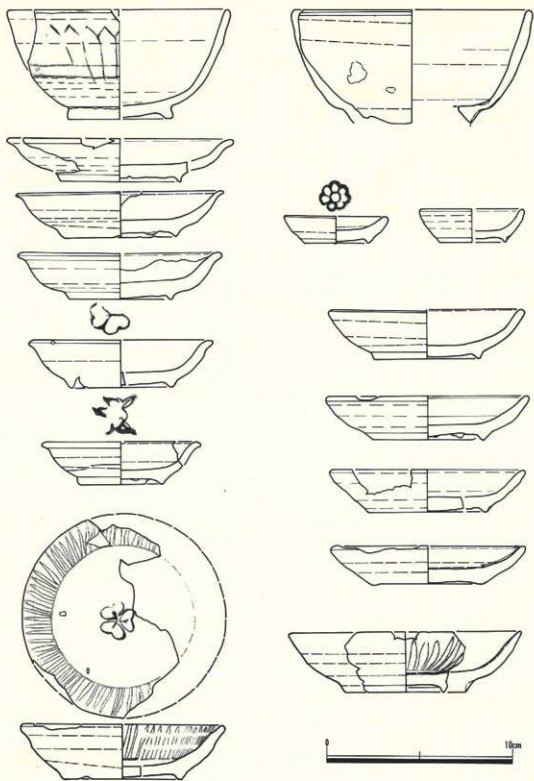
直口縁のものには鑊手の菊皿、内刺し皿、口径5.5cm程の小皿（杯？）等がある。

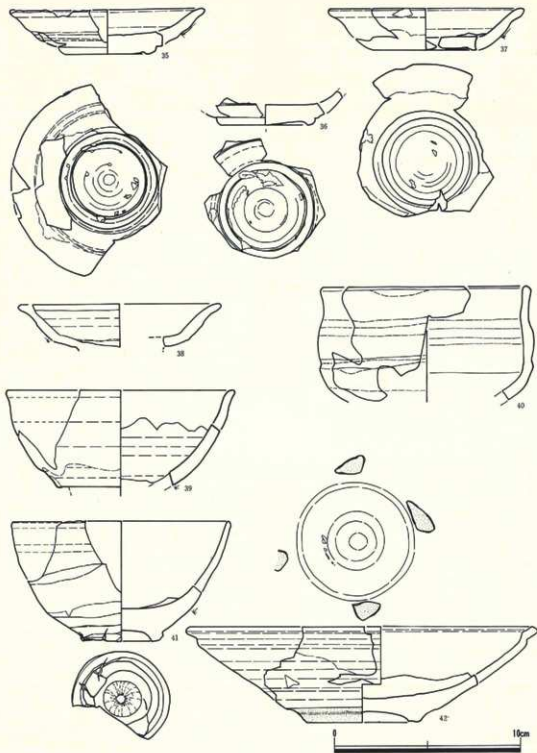
袋物 径4.5cm程と推される底部破片である。底部糸切り放し後に整形している。若干揚底気味でその部分に糸切痕が残る。瓶又は水指の類かと推される。

美濃鉄釉：碗、皿、袋物、浅鉢が出土している。

碗は所謂天目茶碗で口唇が薄く作出され、高台脇の削り巾が狭く、輪高台の丈高のものと内反り高台のものがある。内反り高台のものは胴下部露胎で高台脇の削り巾の広い、低平な碗が多い（29図39）。

皿は外面口縁部下まで施釉される腰折皿、稜皿





とされるものである(29図38)。

袋物は肩付の茶入かと推される肩部破片、水瓶の口縁かと推されるもの等である。22J 2区の採集品で本調査区外の茶入肩付底部破片も写真を掲載した。底面に糸切痕を残す。底径3.2cm。

鉢は口縁が垂直になる露鉢と湯底のこね鉢である。

志野：口縁部小破片が出土している。

唐津：天目型の碗、溝縁盤、ゆるやかに屈曲する輪花皿等で碗1、皿3、盤1個体分を認めた。盤は胎土目積である(29図41、42)。

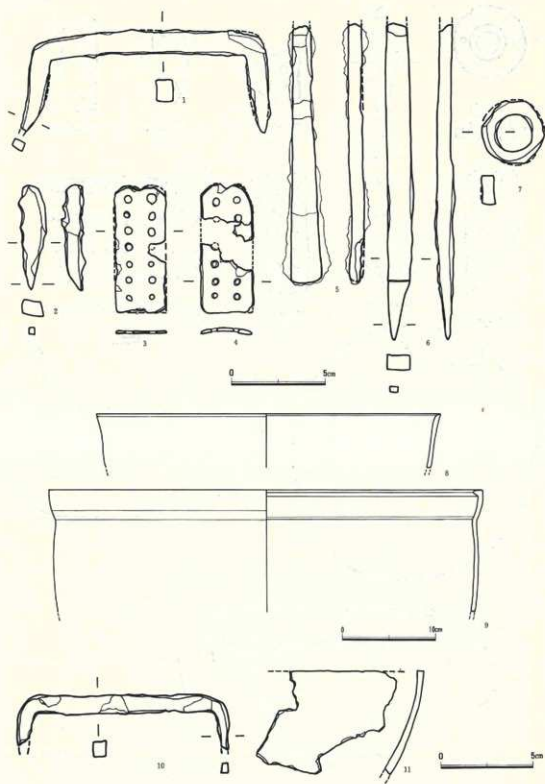
案：口径11cm程、頸部・胴部に屈曲の段があり胴部には凹線めぐる碗である²¹。胎土はあかるい赤味のオレンジ(4ro/6.5/7S)で釉薬は内面浅い黄味のブラウン(6yo/4.5/5S)、外面はやや暗く部分的に、オリブグリーン(10YG/3.5/5S)の発色をする(29図40、PL. 5下)。

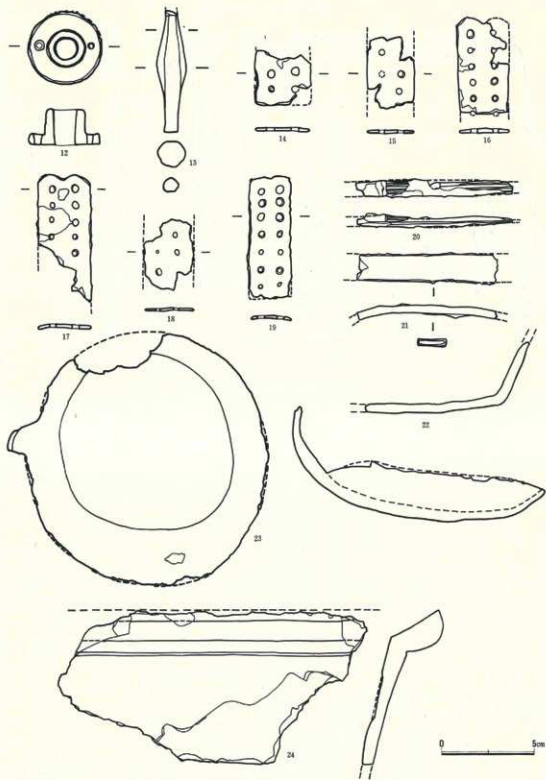
註 井上喜久夫氏より茶碗とのご教示を頂戴した。(松崎)

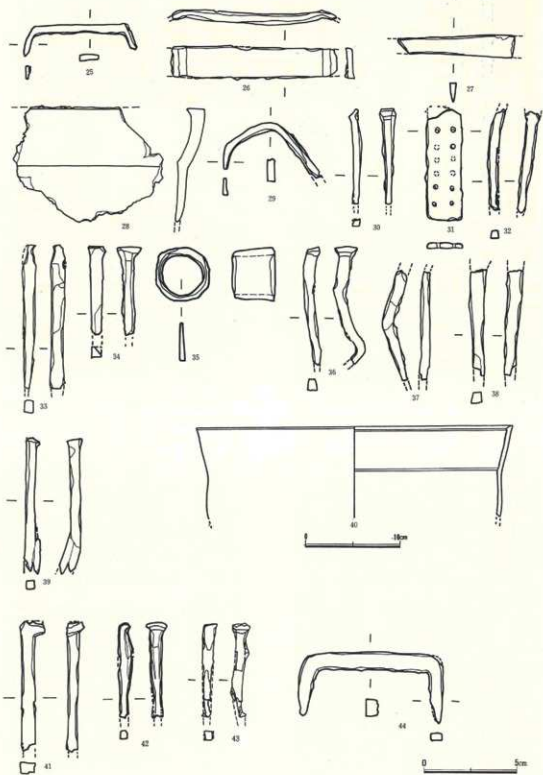
b 鉄製品(第30図1～第33図46)

1号～10号地割面より出土する鉄製品は釘、鋸、楔等の建築用具、生活用具の鋸、製具である小札等多岐にわたっている。その中で出土比率の比較的高い釘・鋸、小札についてそれぞれ幾つかの種類が検出された。釘は大ききでは2寸、2寸5分、3寸の釘が圧倒的に多い。形態は頭部上面が本体に対して45°の角度で上向きになるものと90°ではば水平になるものがあり前者が末使用のものであり、後者は使用することにより頭部上面が水平になったと考えられる。鋸は断面形が方形を呈し整形がていねいな角鋸と断面が偏平な方形を呈し整形が雑な平鋸が検出された。鋸は径の出せるものは径を出して図上復元を行なったが、何分にも残存部が極めて少なく内耳鋸、吊耳鋸等の区別が非常に難しかったが口縁部、胴部の形状、口唇面を水平にした時の口縁部と胴部との角度により可能な限り分類した。²¹小札は頭部中央に切りこみを入れる切付札といわれているもの一種である伊予札が主体を占めるがやや幅が狭いものもあった。1は角鋸である。平鋸に比しやや時期的には古いものといわれている。2は楔かたがねと考えられるものである。先端はとがり、断面はやや偏平となる。3・4は伊予札である。両方とも左右・上下にやや反りかえる。5は用途不明で

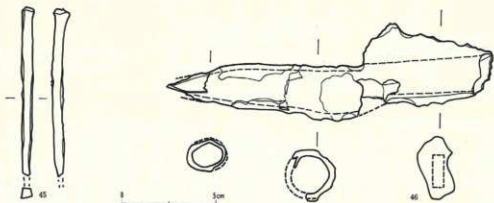
ある。断面が偏平な方形を呈し先端にいくに依り徐々に幅広となる。先端部は丸味をおびる。6は用途不明である。5と同様断面が偏平な方形を呈するが5と違い先端部が徐々に薄くなりとなる。7は農工具の木柄部を締める締金具である。8・9・11は銅である。8は口唇部が口縁部と同じ幅であり内外への張り出しはない。口縁部と胴部の境は屈曲せず、ゆるやかに外反しながら移行し境目が明瞭でない。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度が60°、胴部とのなす角度が70°でありやや外へ開く形となる。口縁部と胴部の形状、全体の器形等より吊耳鋸の可能性が高い。9は口唇部が内側へ強く張り出し口唇部は内側へやや下がる。口唇部と胴部の境には外帯が走り屈曲する。尚口縁部、胴部ともそれぞれゆるやかに外反する。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は70°、胴部とのなす角度は約80°と若干内抱え気味となる。種類は不明。11は口唇面が水平であり口縁部から胴部にかけてゆるやかに内湾し器厚は徐々に厚くなる傾向を示す。銅ではなく皿かもしれない。10は角鋸である。若干腐食が進んでいるのがちがった感じである。12は用途不明である。中央部が周囲に比し極めて高く円柱状に盛り上がり中央に孔を穿つ円形のものである。尚低い部分左右にも小孔が1つつある。13は何らかの容器の足である。断面は円形を呈し中央部径が最も大きい。14～19は小札である。14は下半部より残存しないが幅より考えると伊予札か、頭部右側がわずかに高く上縁は右上りの斜めになる本小札の一種の平小札と考えられる。15、18は中央部分のみであり種類は不明。16、17は伊予札である。腐食が進んでおり本体は板状剝離する。両方とも左右にやや反りかえる。19は伊予札に似ない形状を呈するが頭部中央部の切り込みが浅く全体の幅もやや狭い。20は用途不明である。左端を除き3本の凹線が表面に施される。裏面には凹線はない。断面は偏平な方形を呈し左端にいくに依り徐々に厚みを増す。21は用途不明である。断面が偏平な方形を呈しやや湾曲するもので内部は空洞である。23は灯明皿である。長径13.6cm、短径12.8cmの楕円形で高さ2.5cmで口縁の一部に取手がつく。断面は底部がゆるく湾曲し殆んど平坦な面をもたない。また底部より口縁に向かう立ち上がりもゆるい傾斜である。器厚は底部がやや厚く口縁近くに行くに依り







第32圖 鉄製品



第33図 鉄製品

徐々に薄くなる。24は口唇面が口縁部に比し約30°の角度で強く外側に折れ曲がるように張り出す。口縁部は肉厚となり口縁部外面は強く外反し半円状を呈する。口縁部と胴部の境は60°以上で強く屈曲する。口唇面を水平にして口縁部頂部とはほぼ平行で、胴部とは40°の角度となりかなり外に開く形状を呈する。直径は50cm以上とかなり大型である。このような形態のものは今まで全く出土していない。25は平鏡である。整形は荒く屈曲部分は弱々しい。26も平鏡と考えられるものである。断面は扁平な方を呈する。残存部左右両端は浅い角度で折れ曲がる。27は小柄の刃部である。28は鍋である。口唇部は水平であり口縁部、胴部ともやや内弯する。口縁部、胴部の境は屈曲し外帯をもつ。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は70°-75°である。種類は不明。29は平鏡である。背中央部が大きく折れ曲がる。30、32-34、36-39、41-43は釘である。30、32、43は2寸釘である。そのうち30は頭部上面は45°と上向きになる。33、34、36、37、39、42は2寸5分-3寸の釘と考えられる。頭部上面はすべて本体に対し90°で水平面をなす。38、41、45は3寸釘である。38の頭部上面は本体に対し90°をなし水平である。35は筒形を呈する。戸の引き手かもしれない。40は鍋である。口唇部は口縁部と同じ幅となり内側に傾斜する。口縁部と胴部の境は明瞭でない。口唇面を水平にして口縁部とのなす角度は76°胴部とのなす角度は58°である。種類は不明。44は角鏡である。45は3寸釘である。46は円筒形を呈し先端部に行くに従いとがる。内部が空洞状となっており断面形は基部が方形、先端部は円状の空洞となる。そして先端部へいくに従い内部の

径は小さくなる傾向を示す。これら鉄製品について代表的なものを掲載した。他のものは27K2-7区遺物廃棄場出土鉄製品に比し極めて摩耗している。これは地業等の土の移動等によることも一因と考えられる。その他当地区より銅製品では斧等の刀装具、香炉、銭等、石製品では砥石・茶臼・磨臼の出土がみられる(斎藤)。

註 物質文化42号「北海道の鉄鋼について」越田賢一郎を参考にした。

(3) 小括

1-10号地剖面と仮称したこの地区で、防禦施設、社跡、建物跡、通路?の遺構が確認された。しかし、その建物跡の性格は充分に把握されていない。3-4回の建替えは出土遺物とも併せ、館の成立期の下限と推される15世紀後半から廃止の上限と推される16世紀末葉迄の間、ここに遺構が形成されたことを示すものであろう。

青磁蓮弁碗、盤、香炉、白磁皿、染付端反り碗、周磨文皿、美濃鉄軸碗、香が等々から15世紀-16世紀初頭の年代が、唐津、志野、その他から16世紀末葉の年代が得られており、文献等とも大体符合している。

陶磁器の中に日常計器類の他に、茶入があり、菓?茶碗があり、香炉、盃等もある。金属製品も又、鍋等の他に香炉その他がある。石製品には茶臼があり、笥谷石製の盤(檜木鉢?)があり硯がある。更に未検討の遺物中に仏具その他の存在が推されるのであり、この地区の遺構の性格も複雑であることが推される。

他の遺物等も含め出土位置、帰属を決定する作業をすすめ、この地区を再検討したい。

Ⅲ ま と め

昭和54年来実施されて来た館跡八幡宮跡周辺部での遺構確認調査は本年度をもって一まず終了することとなる。今後、検出された遺構遺物の細かな検討を行い、館の中での本地区の位置付けをしなければならぬが、現時点での概要を記し、その方向を探ることとしたい。

この地区を構成する遺構は防壁施設である空壕、土塁、頂部の櫓列、社跡、居住空間の一部と思われる建物跡、これらをつなぐ通路等である。

防壁施設は館後方に集中するものでありその中心には門が設けられる。土塁頂部の櫓列は、東西両側の沢(谷・斜面)肩に連続し、館の主屋根とも言うべき台地の縁辺を囲むようである。この形が整う迄には、空壕が三度つくりかえられているが、土塁・櫓列東南部で堅穴遺構様の遺構が、最も新しい空壕Aの形成時に削り落されているらしいこと等、館内部の遺構配置も変化することが推定される。

社跡周辺部が祭祀の場として、他とどれ程明瞭に空間を劃されていたかは、当時の信仰形態とも併せて検討されなければならない。又、造営記録²¹との厳密な対比がどれだけ可能かも今後の課題である。この付近で船載染付皿が完成のまま出土した事に留意しているところである。

建物等の形成は、その敷地の地割、造成と一体をなすものである。緩斜面の高い方を削り、一方に盛り土をして段状にその敷地を確保し、盛り土部は石を積んで強化を図り地割としている。台地の中央長軸の左右に交互にこの段が形成される。段の前後、中央寄りには、幅40cm前後の浅い溝が掘られ、小柱穴が不規則に無数検出される事が多い。両側は前述のように1条の溝と柱穴列が連なる。

この間数回の造り替え、建て替えが行われる。

地割内には堅穴遺構と掘立柱建物跡の存在するのが一般的である。これらの軸線はほぼ、地割面のそれと一致する。堅穴遺構と掘立柱建物跡がほぼ同時期となる事は既に述べたが、それが、各地割面の中で対をなして完結するのか、数箇所各地割面を単位として、把握できるのかは、両遺構の性格付け、機能と合わせ、今後の課題である。

これには、59年度調査の待屋敷跡で検出さな

かった事も考慮しなければならない。²²

堅穴遺構床面の焼土炭化物中から、魚骨が出土したが、勝山館跡内から検出の堅穴遺構の過半から、地床炉が検出され、炭化物、鉄鍋等が出土するであろう事が推されており、²³炊きさんの場でもあった事を示唆するものであり、その機能の一端を伺わせる。

一方掘立柱建物跡も各地割面によってその形状が異なっているようである。例えば、第9号地割面では3間四方の方形を基調とする遺構が推されたし、第10号地割面では、3間×3間の1室を建物内に有する遺構が推測された。

極めて大雑把な数値であるが9号地割面では、播鉢の出土率が極だっており、10号地割面では、播鉢が少なく、茶器等の出土が多いようである。²³

これは1例として示した事であって、個々の遺物の正確な帰属はこれからの作業であり、金属製品、石製品等の遺物全体の検討後に結論づけなければならない。

尚、遺構を把握するに際し、当然の事ではあるが盛り土部分での柱穴確認等が難しく、建物規模の解明を不十分なものとしている。

陶磁器等の遺物量の多い内容の多様性については既に述べたところであり、それらから推される年代についても触れた。

陶磁器の中に遺物廃棄場所から出土のものとの接合例があり、廃棄場所の層序、遺構内の出土位置の関係を検討する必要ができた。

廃棄場所から多量の羽子、鉄滓が出土しているが、60年度調査区内からはこの同類は出土していない。本報で鉄滓?として報告したものは、全て小さな粒状の溶融物であり磁器等の焼形滓などは異質であり、専門家に判断を仰ぐ必要がある。

米、粟?ソノ?豆?魚骨等の出土は、日常生活の一端を伺わしめている。ソノ?については59年泥炭層中の花粉分析により、その栽培が推定されていたところである。²³

中央軸線上には不十分な調査からではあるが、建物跡等の遺構は存在しないと推された。恐らくはここが通路としての機能を果たしていたのであろう。この通路に面した各地割面(遺構)への出入

口が把握できなかった事は遺憾である。又、調査の項で触れできなかったが、9号地割面東南隅は上段の7号地割面との往来がしやすい状態にあり、こうした隅が中央とは別の連絡通路として機能していた事が想像された。

土塁、欄別跡東端の華ノ沢側から空壕中央に到る旧道が検出されている。一方空壕を渡るための旧道跡も検出されている。後者の旧道跡は、寛保元年降灰のOs-a火山灰がその上面を覆っておりそれ以前とされている。前者について、火山灰との前後関係は不明瞭であり、両者が同時に形成、使用された事については明確ではない。前者の道が1770年に館神八幡宮の造営時につくられた可能性も考えられる。それは、この時に社跡の周囲が土堤で囲むように整備される為、一時、かつての門跡を通る道が閉鎖された可能性があるからである。

勝山館に関する文献上の記録は文明5年(1473年)館上に八幡宮を祀るとあるのが初現であり、天正17年(1589年)五代慶広ノ国在^{註4}とあるのを下限とすることができよう。又天明8年(1788

年)幕府巡検視に随行した古川古松軒は「上ノ国の古城は慶長の初めに松前へ移した」と案内の者が語った事を記している。^{註5}

青磁篋形煎茶碗、端反り碗、珠洲系播磨鉢等の出土品は、その上限の年代に近いものであり、唐津、^{註6}志野焼等の製品はその下限の年代に見合うものである。

出土状況の細部が未検証ではあるが、本調査区の遺構の年代は遺物、文献両者から15世紀後半から16世紀末葉の間に求め得ると思われる。

尚細部については多くの資料の整理、検討を加え、より具体的に本地区の様相を明らかにしたいと考えている。

(松崎)

- 註1 新羅之記録 福山秘府
 2 史跡上之国勝山館跡Ⅳ
 3 ○ ○ ○ V
 4 註1に同じ
 5 東遊雜記 古川小松軒
 6 国内出土の肥前陶磁、大橋康二氏のご教示による。

表1 焼土、炭化物等成分抽出表

	サンプル 粗	サンプル 量	磁器 成分	砂鉄 ?	鉄滓 ? (備註)	鉄製 品	磁器 破片	粉 炭 灰 化 物	水 炭	米	葉?	骨	堅 硬 物 (く み ?)	豆?	ソバ?	加工 品	本 邦 植 物	純
第 9 号 地 割 面	焼土1	35.658	77.9	11.3	0.7	1.9	0	0	0	0	0	0	2.6	0.1	0	0	0	0
	* 2	14.946	74.2	8.6				0.4	0.2				1.1					
	* 3	15.090	16.7	4.8				0.5					8.6					
	* 4	0.480	5.1	1.6	少								少					
	* 5	7.420	83.2	26.7				0.5										
	* 6	9.800	120.5	7.8	少								0.1					
	* 7	1.122	37.8						0.3									
	* 8	6.333	15.3	9.3	6.0	2.8		1.5	12.1	1.4			少				0.3	0.3
第 9 号 地 割 面	炭化物集積1	15.210	17.6	0.4	0.8			61.6	90.0				0.7			1.49	1.49	○
	* 2	126.710	194.1	50.9	23.4	0.7	2.2	208.7	304.0				3.9	4.8		4.9	5.5	○
	* 3	2.350	12.2	1.0	0.2		0.3		14.1				0.5			1.1	1.1	
	* 4	1.470	3.1	0.1														
	* 5	10.390	14.4	11.2	0.6		16.4		28.2	15.4	12.2	少						
第 9 号 地 割 面	1号土壌	39.472	12.2	3.5	0.3	0.7		0.3	4.5	27.8				0.2				
	2号土壌	48.290	104.3	26.9	0.8	3.7		0.1	19.4				15.3	0.2			0.1	
	32号壁穴床	23.030	56.7	10.4	0.9			0.1	10.1			2.1						
第 9 号 地 割 面	焼土1	13.096	522.1	14.1	13.0	6.3	42.9	123.0	290.0	19.1					1.2		0.1	
	* 2	15.440	27.1	6.3				8.5				0.1						
	炭化物集積	251.522	791.2	32.0	130.0	22.5	26.9	190.0	1,252.6	1,092.5	15.5	0.3	0.5	0.5	9.7		1.2	○

表2 出土陶磁器集計表

調査年度	器種	数量										産地					合計				
		青磁	白磁	染付	赤絵	黒絵	小計	瀬田	越前	志野	唐津	小計	(編笠計)	越前	珠洲	美濃		津津	信濃	互賀陶器	小計
第8行徳川初期	陶	9	1	1			11	3	8		2	13	(34)								24
	皿	2	5	4			11	9	1			10	(21)								21
	杯																				
	盤	1					1				2	2	(3)								3
	香炉											1	(1)								1
	襷鉢													16							16
	腰置鉢													1			2	4			7
	磁物					1	1						(1)								1
	その他											1	(1)								1
	計	12	6	5		1	24	12	11		4	27	(51)	17			2	4		23	74
陶	58	2	27	3		90	39	33		4	76	(166)								166	
皿	30	118	86			240	165	5		1	171	(411)								411	
杯																					
盤	2	2				4						(4)								4	
香炉																					
襷鉢													140	1	1					142	
腰置鉢													6		18	15				39	
磁物					1	1						(1)								1	
その他																					
計	90	122	113	3	1	335	204	38		5	247	(582)	146	1	19	15			181	763	
陶	6	1	16			23	24	8			32	(55)								55	
皿	7	19	31			57	29	2		3	34	(91)								91	
杯																					
盤			1			1						(1)								1	
香炉	2					2	3	1			4	(6)								6	
襷鉢													19							19	
腰置鉢													10			3				13	
磁物					7	7						(7)								7	
その他										2	2	(2)								2	
計	15	20	48		7	90	56	11		5	72	(182)	29	3	32				32	194	
陶	52	17	88	3		160	35	52	1	7	16	(11)	(271)							271	
皿	38	185	176			399	253	5		9	267	(666)								666	
杯	2					2						(2)								2	
盤	2		10			12				13	13	(25)								25	
香炉	7					7	1					(8)								8	
襷鉢													205		1					206	
腰置鉢													26		17	25	1			69	
磁物					27	27		4				(31)								31	
その他								2				(2)								2	
計	99	204	274	3	27	607	291	61	1	7	38	396	(1,005)	231	1	17	25	1	275	1,280	
陶	125	21	132	6		284	101	101	1	7	22	232	(516)							516	
皿	83	327	297			707	456	13		13	482	(1,189)								1,189	
杯	2					2						(2)								2	
盤	5	2	11			18				15	15	(33)								33	
香炉	9					9	4	2				(15)								15	
襷鉢													380	1	2					383	
腰置鉢													43	18	34	32	1			128	
磁物					36	36		4				(40)								40	
その他								2	1		2	(5)								5	
計	222	352	440	6	36	1,056	563	121	1	7	52	744	(1,800)	423	1	20	34	32	1	511	2,311
陶	8	3	4			15		4				(4)								19	
皿	27	9				36	10					(46)								46	
杯	1					1						(1)								1	
盤																					
香炉														2						2	
襷鉢														1						1	
腰置鉢																				1	
磁物																					
その他								52	10	4		(65)	3							3	
計	8	30	14			52	10	4			14	(65)	3							68	
合計	230	382	454	6	36	1,108	573	125	1	7	52	758	(1,865)	426	1	20	34	32	1	514	2,380

Ⅳ 保存処理

勝山館において昭和54年度より現在まで出土した多数の鉄製品及び木製品の処理を昭和58年度より国の補助を得て10ヶ年計画で行なっている。

1. 木製品

① 常温含浸 (第34図1、3)

従来よりPEG20%浸漬中のものはPEG40%浸漬へ、PEG40%浸漬中のものうち一部は今年度後半PEG60%以上の恒温含浸を行なった。尚第34図1、3はPEG40%浸漬終了1ヶ月前の状況であり第35図1は同図2へ、同図3は同図4の恒温含浸へとそれぞれ推移する。尚PEG20%浸漬は約1年～2年、PEG40%浸漬は約6ヶ月～1年程行なっている。

② 恒温含浸 (第35図、第34図2、4)

第35図は今年度前半の処理状況である。処理した木製品は直径25cm、厚さ0.9cmの桶底、長さ30cm、幅9cm、厚さ1.5cmの板材等である。図によると昨年の分析通りPEG80%浸漬2ヶ月後に木製品の重量が81gと安定し含浸完了のようである。その後のPEG100%浸漬については昨年度3ヶ月間の浸漬による観察の結果殆んど木製品の重量変化が見られないことよりPEGが高濃度のため水とPEGの置換があまり行なわれないことと考えられ、今年度は約1ヶ月間で打ち切った。次に第34図2、4は今年度後半の処理状況である。2は長さ30.5cmの杭、縦24.7cm、横5.5cm、厚さ0.6cm程の板材等やや大型のものであり、やや脆弱化しているもの、4は長さ15cm～25cm、厚さ0.5cmの板材・長さ13～20cm、厚さ0.2cm～0.3cmの柱材等比較的保存状態がよいものを含浸処理した状況である。尚今年度後半の処理はPEG60%、PEG80%の浸漬期間を従来通り2ヶ月間としたがそれ以後の高濃度100%浸漬は昨年度の分析により重量変化が殆んど見られないこと、さらに急な高濃度への切り換えは木製品内よりの急激な水分の吸収により木製品自体に収縮等悪影響を及ぼす²¹ことによりPEG水溶液濃度を2は85%、4は92%になるようにそれぞれPEGのつぎ足しを行ない様子を見た。2はPEG水溶液に比し木製品の体積がやや大きい事によりPEG687gをつぎ足し後その間濃度が79%より上がらず、その後84%に濃度が上がった後も重量は増加の傾向を示している

ることより木製品内の水とPEGの置換が進んでいることがわかる。4はPEG80%含浸終了前にPEG濃度が90%近くになっており木製品の重量は一定化していた。その後PEG濃度が92%になるよう165.5gのつぎ足しを行なったところ木製品の重量は若干の下降線を示す。これらよりPEG90%が含浸完了濃度と考えられる。

2. 漆器

今年度は20点の処理を行なった。昨年同様アルコール樹脂法を用いた。²²方法はメタノール20%浸漬より開始し徐々に濃度を上げメタノール100%浸漬まで行ないさらにメタノールとキシレンの混合液からキシレン100%に置換し最後にパラロイドB72のキシレン溶液に浸漬させ含浸強化するものである。この過程の最終段階でパラロイドB72のキシレン溶液を初めは10%溶液としたが濃度が高すぎたためこの溶液が漆器本体へ含浸せず、外側のみに皮膜が出来てしまった。このため、二段階に分けず最初は5%溶液、その後10%溶液により徐々に含浸させた。²³

3. 鉄製品

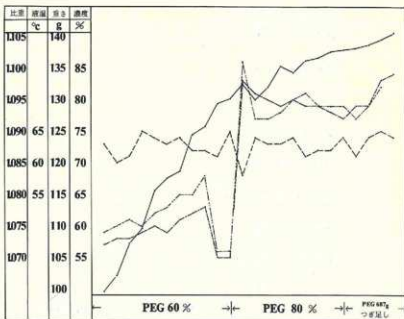
今年度は昨年同様400点の処理を行なった。方法は昨年と同じく錆除去、メタノール脱水、パラロイドNAD-10のナフサ溶液による減圧含浸である。また出土遺物中最も腐蝕しやすい銅は他の鉄製品と同様錆除去の後脱水のためのメタノール浸漬を行なったが、メタノール浸漬後すでに亀裂が生じかけていた。これは本体外側の錆除去により本体周囲の環境が激変したこと及び弱っている本体に対してのメタノール浸漬が本体に負担をかけたことによると考えられる。そのためその後はまずメタノール脱水後、錆除去という方法をとる。本体への急激な環境の変化を緩和させることとした。またパラロイドNAD-10のナフサ溶液による減圧含浸については当初濃度を20%で3回行なっていたが、1、2回目は濃度30%とし遺物の強化も兼ねて行ない、その後錆除去の際除去できなかった錆をとり、3回目は20%溶液に浸漬させた。²⁴

4. 来年度の予定

木製品はPEG80%浸漬中の36点を恒温乾燥機を用いて処理を完了する。さらに恒温水槽により1,200点の処理を完了する。漆器はアルコールキ

比量	液温	液量	濃度
	°C	g	%
1080	25	110	
1075	20	105	40
1070	15	100	35

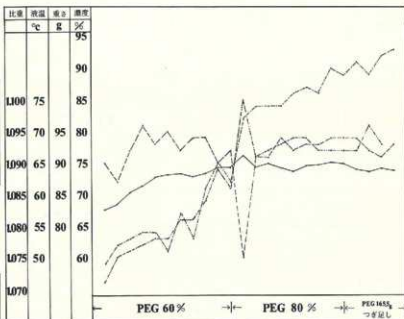
1



2

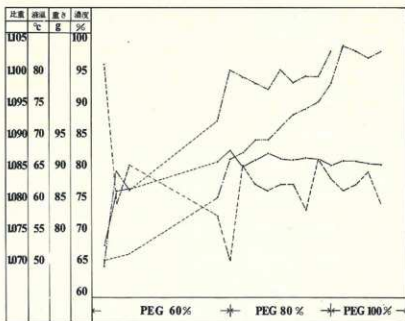
比量	液温	液量	濃度
	°C	g	%
1080		90	
1075	20	85	40
1070	15		

3



4

比量	-----
液温	-----
液量	-----
濃度	-----



第35図 木製品保存処理グラフ

シレン樹脂法により20点の処理を行なう。鉄製品は今年度同様400点の処理を合成樹脂減圧含浸により行なう予定である。

奈良国立文化財研究所 沢田正昭氏、北海道開拓記念館 三野紀雄氏、小林幸雄氏には多大なる御指導を賜わった。文末ではあるが深く感謝いたします。(齊藤)

V 環境整備工事

上之国勝山館環境整備事業は、北海道中世史の舞台となった勝山館の遺構をわかりやすく表わし、量感に富む歴史的事実を確認できる社会教育の場とし、また周囲の自然や雄大な景観を生かし地域レクリエーションの場とすることにより、地域住民のふるさと意識の高揚をはかり、風土にのぞした地域づくりにつなげていくことを目的としている。

遺跡の整備にあたっては、①遺跡の十分な保護②遺跡内容の適確な表現③遺跡の経てきた歴史の表現④遺跡の規模の表現、の4点を原則としたが、上記の目的に従い、歴史庭園としての魅力をも加味するよう素材の選択等に配慮した。

昭和60年度の整備事業は、発掘調査の完了した

註

- 1 奈良国立文化財研究所 沢田正昭氏の御教示による。
- 2 北海道開拓記念館 小林幸雄氏の御教示による。
- 3 北海道開拓記念館 三野紀雄氏の御教示による。

遺構のうち、勝山館の重要な位置を占める館神八幡宮跡を対象とした。

以下、工事の概要を述べる。

全体の構成

館神八幡宮跡には、松前氏始祖武田信広建立と伝えられる社跡を中心に、中世と近世の遺構が混在してみられる。中世の遺構としては土塁、土塁頂部の櫓跡、土塁中央の門跡及び、土塁の内側にみられる竪穴状遺構と掘立柱建物跡の建物遺構、棚跡がある。また近世の遺構としては、礎石建物跡及び土塁を横断するかたちで石積み階段、古道跡がある。

土塁は、直径約20mの半円形で、中央が自然研

究路で両断されている。高さは最頂部で3m程である。土塁頂部の櫓跡は、溝状遺構としてみられ木柱列があったと推測される。一部には、大走様の石列もみられる。中央の門跡は、自然研究路脇の他と異なる形状の柱跡から推測されたものである。

土塁の内側にみられる竪穴状遺構と掘立柱建物跡は位置的に重複しているものや、土塁の下に埋まっているものなどがみられるが歴史的経緯は不明な点が多い。掘立柱建物跡のうち西側にみられる4本柱の建物は、位置的に文明5年(1473)創建の館神八幡宮のものとして推測された。

また、これと隣接する近世の礎石建物跡は、明和7年(1770)再建の館神八幡宮のものとして推測され、その前面に鳥居跡と考えられる柱跡がみられ周囲一帯には玉砂利敷の跡がみられる。

石積み階段及び古道跡は、東側土塁の一部をけずり土塁を横断している。

整備にあたっては、原則として中世の遺構を優先して表現したが、近世の遺構も歴史的な意味があり、明確にあらわれているので煩雑にならない程度に共存させた。建物跡として表現したのは、「室町創建社跡(掘立柱建物)」と「江戸再建社跡(礎石建物)」の他「掘立柱建物跡」2棟分で、掘立柱建物跡に重複してみられる竪穴状遺構は、相互の歴史的関係が明確でないうえ見学者に煩雑な印象を与えるので表現しないこととした。建物跡に関連しては、敷地境界を示す「櫓跡」と「鳥居跡」を表現し、玉砂利も残した。

「土塁」は近世にけずられたと考えられる部分を復元し、土塁頂部の「櫓跡」も復元した。土塁中央の門跡は、今後の整備事業の際、資材搬入の妨げになり損傷の危険もあるため今回の整備対象からはずした。土塁を横断する近世の「石積階段」及び「古道跡」は、土塁の中央の姿を優先させつつ表現した。なお、整備範囲は芝張で明示した。

これらの遺構の表現にあわせ、説明板、表示板を設置した。

各遺構の整備

建物跡

建物跡は、当時の姿を伝える資料が無いため、

復元はせず各遺構の形状を白御影石割肌仕上げの緑石で囲い、伊勢砂利敷で表わした。掘立柱建物跡については、柱の形を白御影石割肌仕上げの緑石で囲い五色砂利敷で表示した。礎石建物跡については、発掘された礎石列をそのままあらわし礎石の欠損部2ヶ所を白御影石で補充した。江戸再建社跡の前面の鳥居跡は、柱の形を白御影石割肌仕上げの緑石で囲い五色砂利敷で表した。周囲の玉砂利は発掘されたものを使用し、発掘時の形状に従った。敷地境界を示す櫓跡は、建物跡より巾の狭い白御影石割肌仕上げの緑石で囲い、伊勢砂利敷で表わした。なお、建物跡の表現に使用した緑石は、遺構保護のため基礎を設けず設置した。

土塁

土塁は、現在の形状を尊重した。近世の石積階段、古道で土塁が低くなっているところは土盛りし中世の土塁の姿を表わした。なお土塁の頂部の櫓跡の復元にもない、櫓の安定のため全体に土盛りをした。土塁頂部の櫓跡は、溝状の遺構から丸太杭が列状にたてられていたと推測され、かつその表現が館神八幡宮跡の遺構形状を表わすうえで重要な要素となるため、ヒノ丸太直径12cm地上高1.35m全長26.4mの櫓跡として復元した。設置にあたっては、構造的に安定を高めるため、2.64mごとにボルトで縛結し、2ヶ所に控柱を設けた。なお、土塁頂部の樹木は土塁の形状を強調する役割を果たしているため保存した。

石積階段及び古道跡

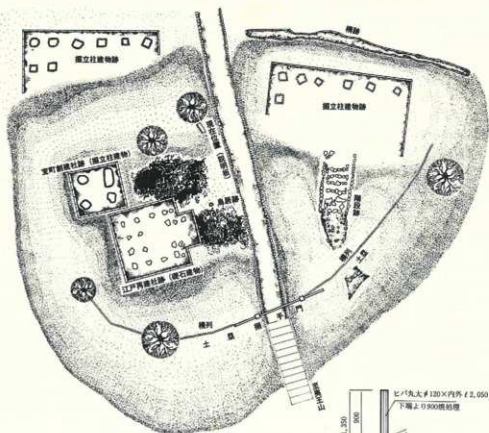
石積階段は、そのままあらわし、階段に続く古道跡は伊勢砂利敷で示した。

説明板及び表示板

説明板は、黒御影石パーナー仕上げの石板に、ステンレスヘアライン仕上げの名板をとりつけ、地図と説明文をシルクスクリーン印刷した。

表示板は、白御影石割肌仕上げの石板に各板部をみがき仕上げし、遺構名を彫り込んだ。

(柳田・石塚建築設計事務所 石塚雅明)

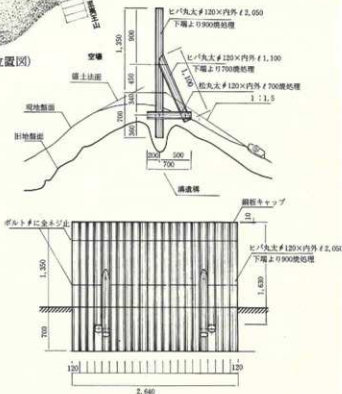


説明板見取図(館神八幡宮跡遺構位置図)

(説明板説明文)

文明5年(1473)松前氏始祖武田信広は館の中に八幡宮を祀り館神と称した。この頃迄に勝山館も成立したと思われる。館の頂部、西側から南側に土塁が築かれ、欄列が立ち並ぶ。土塁の外側には空堀がめぐる。この堀、土塁・欄で後方を御祭したのである。土塁中央に搦手門が設けられ、堀を渡る橋が架けられていた。

土塁の内側で掘立柱の建物跡と礎石立の建物跡が発掘された。掘立柱建物は創建時の社跡と思われる。礎石建物は明和7年(1770)再建の社跡で、前面には鳥居跡もみられていた。北東部分の土壇はこの時に盛り土されたものである。現在の上ノ国八幡宮本殿はその時の建物を移築したものであろう。



第36図 説明板詳細・欄列復原正・側面図

Ⅵ 結 び

勝山館跡における館神八幡宮跡周辺の遺構を明らかにする為には、尚調査の不充分さが残り、資料整理の進捗をまたなければならぬ。しかし難気ながらもその概要は推測されるようになった。

昭和54年検出の大きな柱穴が勝手門の柱跡であることが明らかとなり、更に空壕を渡る橋の存在も明らかにする事ができた。

この橋は三条の空壕のうち、一番内側で年代の新しい“A”と仮称して来た壕に伴うものであり、外側の“B”の壕が古いものであった事を再確認することにもなった。

壕の内側、門の両側は土塁が築かれ、頂部には欄干が並ぶ。

館の内側西南端には、館に関する最初の記録である文明5年創立の館神八幡宮に関連する遺構が検出された。

現自然研究路部分は、館の時代にも通路であったらしく、これを中央に、左右に地割がなされ、建物が数次に亘って建てられていた。

各地割には緩い傾斜面の高い方を削って低い方に盛り土をして階段状に土地をつくり、その強固の為には、石を積み、通路側、段の下には、やや広目の浅い溝が掘られ、土止と礫を兼ねた層が設けられる。両側の沢（谷）沿いには溝が1条設けられ、内部に1列の柱列が並ぶ。

こうして区画・造成された各地割の規模は、この地区に於てはそれ程大きな差がなく、内部には掘立柱の建物と竪穴遺構が設けられている。

竪穴遺構と掘立柱の建物跡との間には時間差があると考えた事もあるが、ほぼ同時代として良いようである。尚、一地割面内に掘立柱の建物と竪穴が一組で設けられていたかどうかについてはまだ資料が不足している。

掘立柱の建物跡は地割面によって規模等に違い

があり、出土する遺物の組み合わせも又異なるようである。

これらの遺構の形成年代は出土遺物から15世紀後半から16世紀末葉の間とする事ができ、文献上の記録とも、ほぼ符合するものである。

これが、館神八幡宮跡周辺についての遺構確認調査等によって得られた概要である。

今後は、各々の地割、建物についての細かな分析を通しての特定化が大きな課題である。

層序、遺物等の細部について再度検討するとともに、考古、建築をはじめとする関連する諸分野の諸先生に、ご指導を仰がなければならないと考えている。

勝山館跡の整備事業が開始されて久しいが、愈々本格的な整備が開始されることとなった。

土塁・土塁頂部欄干跡の地上復元、室町、江戸、両時代の館神八幡宮跡、掘立柱建物跡、欄干跡等の遺構が表示され、それぞれを示す表示板や説明板も設置された。

維持管理等に課題も多いが、更に整備が推進され、多くの人々が訪れ、史跡に親しみ、理解してくれる場となる日の一日も早い事を心待ちにするものである。

整備の前提となる遺構確認調査や資料整理を行う筆者等の浅学と菲才は、本事業にとって今一の隘路かと思う。本概報も又調査や、整理の不充分さを露呈するところとなっている。関係機関、諸先生、諸先学の一層の御指導と御叱正をお願い申し上げます。更に微力を尽したく思うものであります。

(松崎)

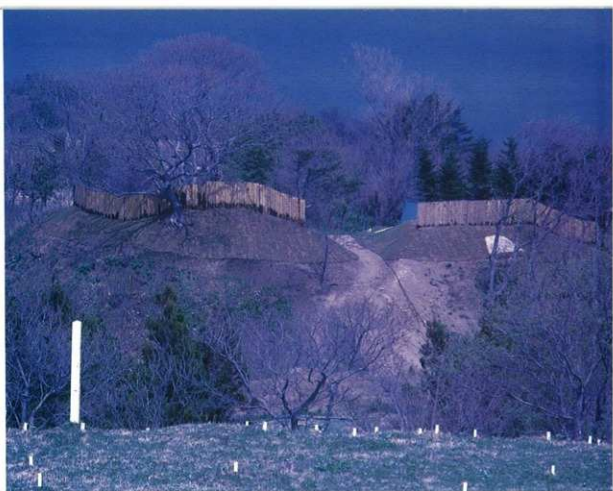
版 圖



PL.1 館神八幡宮跡整備状況（東より）







PL. 2 整備状況 柵列の整備(上) 館神八幡宮跡(下)







PL. 3 整備状況 (掘立柱建物跡)





PL. 4 調査状況



門、楯柱跡

第9号地剖面



第10号地剖面





青磁



白磁



美濃



美濃鉄軸



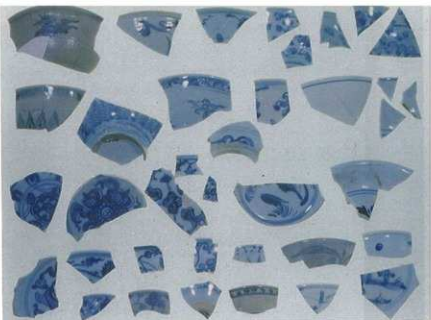
朝鮮、宋、唐津

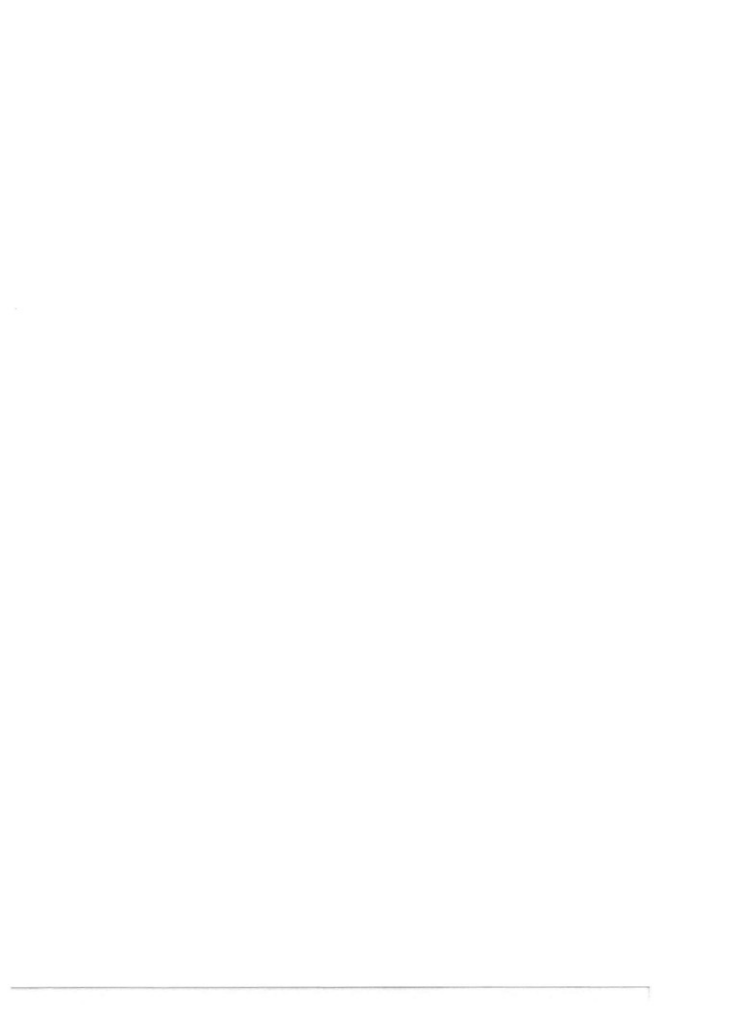




PL. 6 出土陶磁器(2) 青磁(上) 白磁・赤絵(下)









PL. 8 出土陶磁器(4) 美濃(上) 美濃鉄胎、唐津、朝鮮(下)







東より（手前左は洲崎館跡）



西夷王山より



墳墓群第1地区より柵列、館きのぞむ



柵跡、掘立柱建物跡、八幡宮跡、柵列（北東より）



南東より柵列をのぞむ



北東より建物跡、石段、柵列をのぞむ

PL.12 整備状況



宝町期社跡 (南東より)



江戸期社跡 (東より)



構列跡地上復原



説明板

PL.13 整備状況



表示板他

掘立柱建物跡

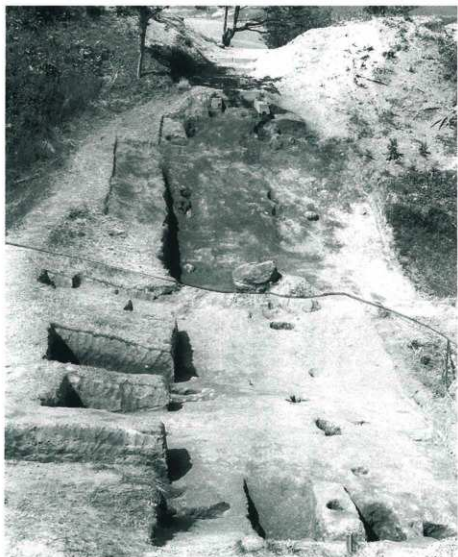


PL.14 門、橋柱跡
調査土層断面



PL.15 門柱跡





南より橋柱跡、門跡をのぞむ(上)

橋柱跡(北土塁上より)





柱穴断面



柱穴（空壕A北斜面）

空壕Bと柱跡





旧遺跡



旧遺跡



空堀底の集石



PL.19 門橋跡調査終了



南より



北東より

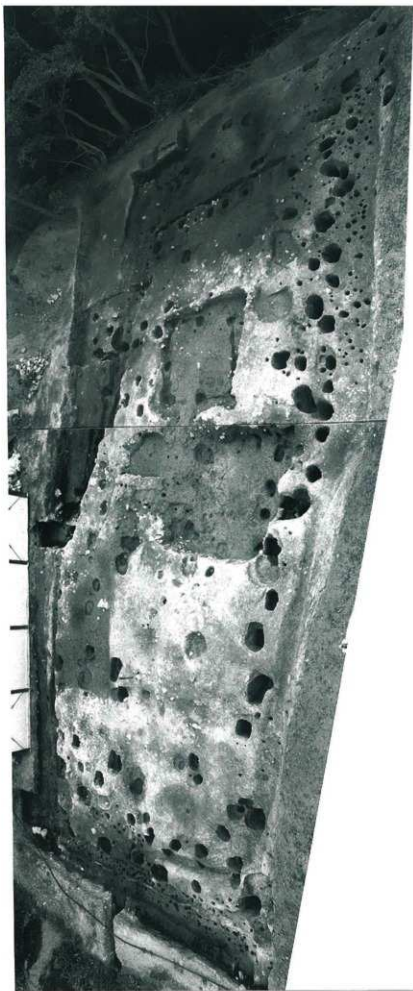


北西より

PL.20 空壕跡（楯柱跡調査区）出土遺物



PL. 21 第9号地剖面
(南より)





西半(上) 南より
東半(下) 東より

西より



北側の溝・段 (西より)



南側の段溝 (東より)



西半 (北より)



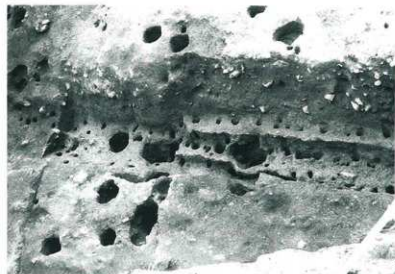
北側の溝・段
(西より)



西側の溝
(南より)



東半 (北より)



(北より)

北側の段・溝



(東より)

PL. 24 第9号地剖面



PL. 25 第9号地剖面
土層断面

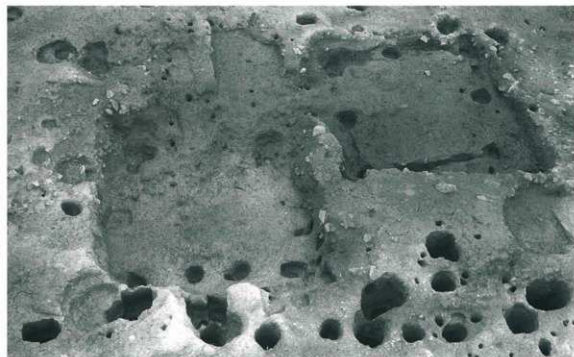
2号土壌

1号土壌



地割北側の断・溝





32、23号竖穴（南より）



PL. 26 第9号地剖面遺構

32号竖穴（中北より、下南より）





PL.27 第9号地割面遺構

23号壘穴(上南から、中北から)



土層断面(南より)





集石



遺物の出土状況



調査終了後





砂鉄?



鉄滓?



骨

PL. 30 第9号地剖面出土遺物



砂鉄 7



骨



焼土 3

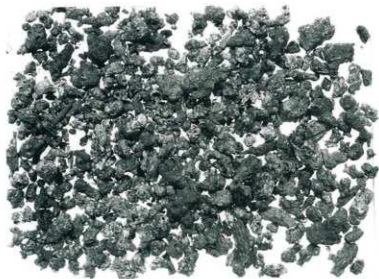


焼土 6 骨



焼土 7

磁着成分



鉄滓?



木炭



粉盒状炭化物



米



鉄滓?



ナフ



禾本植物



粉盒状炭化物



堅果



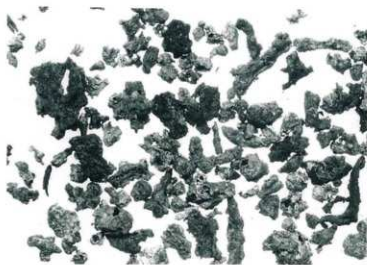
磁着礫片



木炭



鉄滓?





豆?



堅果



PL 34 第9号地剖面出土遺物 (炭化物集積2)

粉食状炭化物



骨



骨角器



禾本植物



ナワ





磁着礫片



鉄滓7



米



粉食状炭化物



鉄滓?



骨



2号土層



32号竖穴

鉄滓?

骨





青磁



白磁



染付

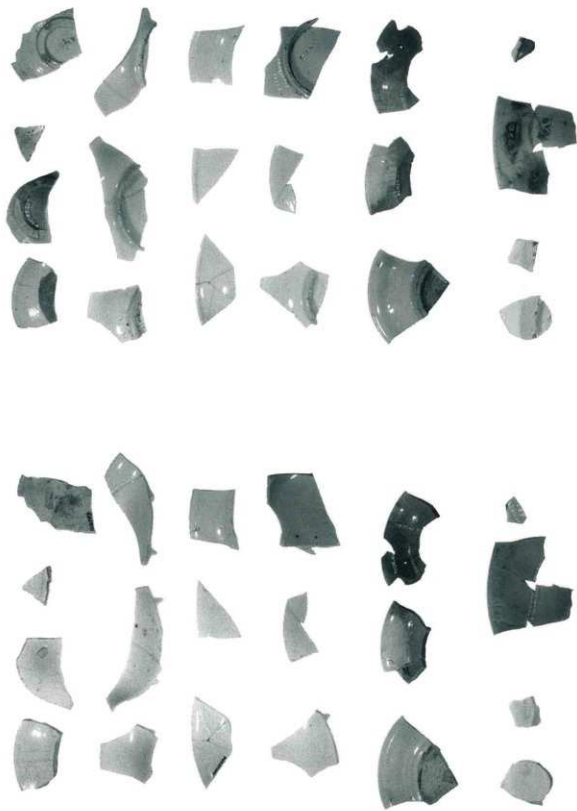


美濃 (灰釉・鉄釉)

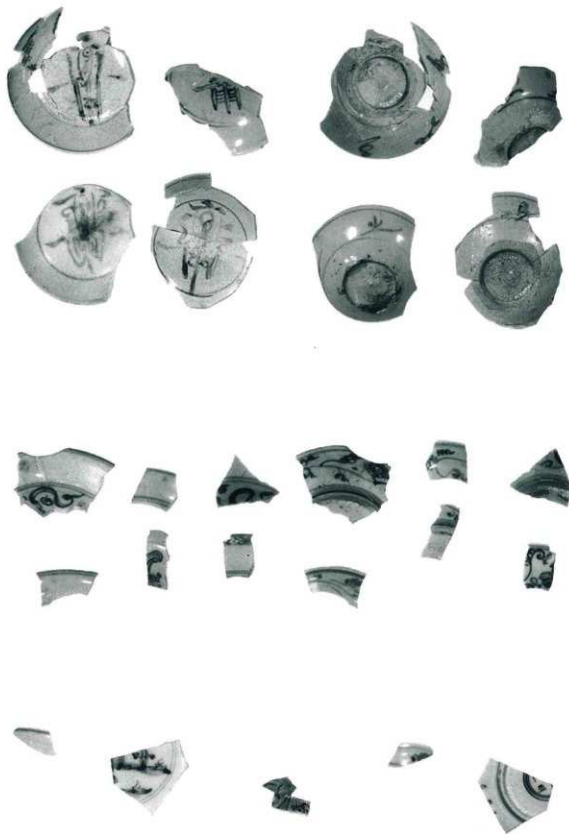




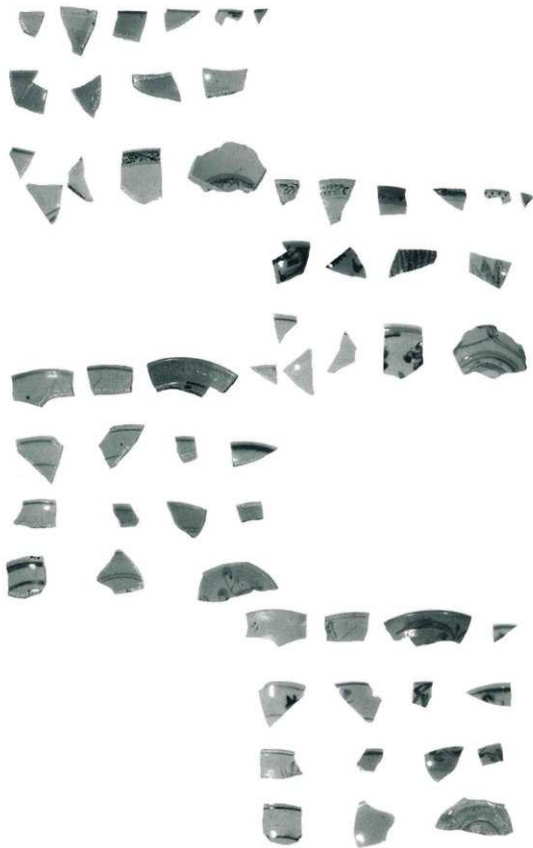
PL.40 第9号地剖面出土磁器（白磁、赤绘）



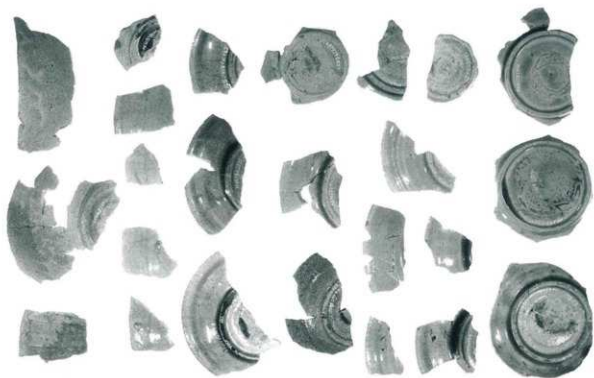
PL.41 第9号地剖面出土磁器(染付)



PL. 42 第9号地剖面出土磁器 (染付)

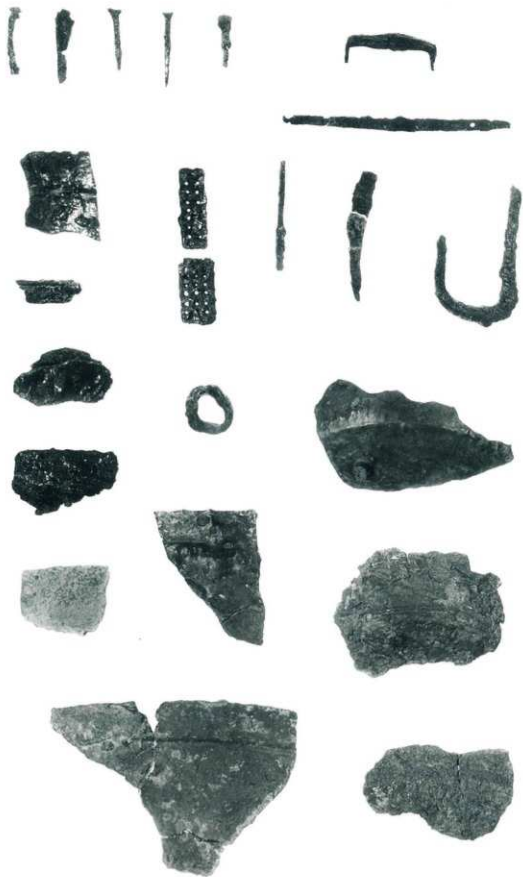


PL. 43 第9号地割面出土陶器 (美濃)









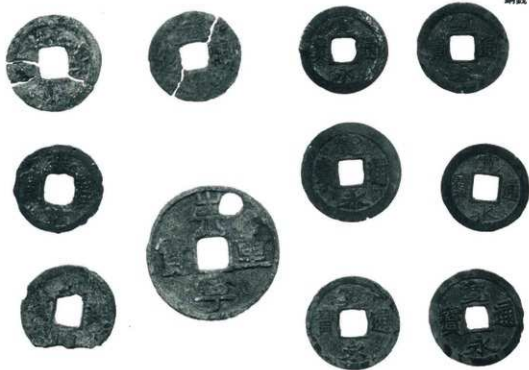


骨角器

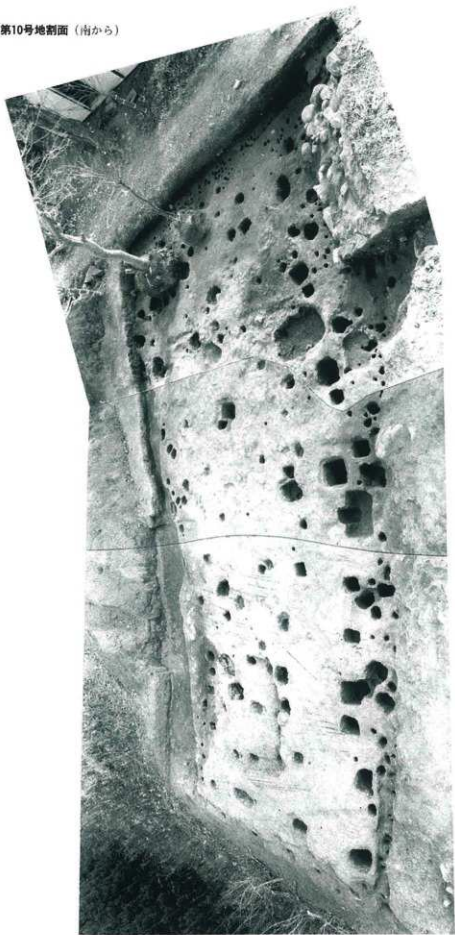


銅製品

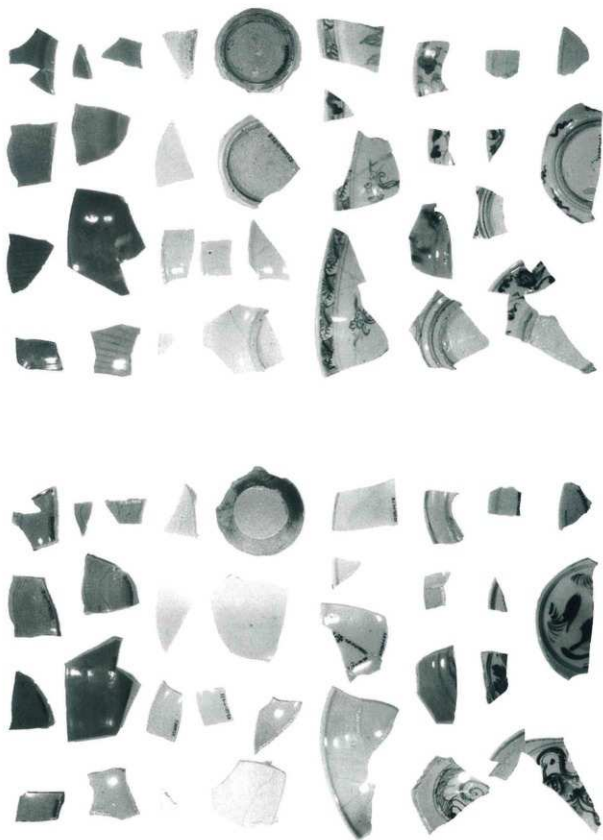
銅銭



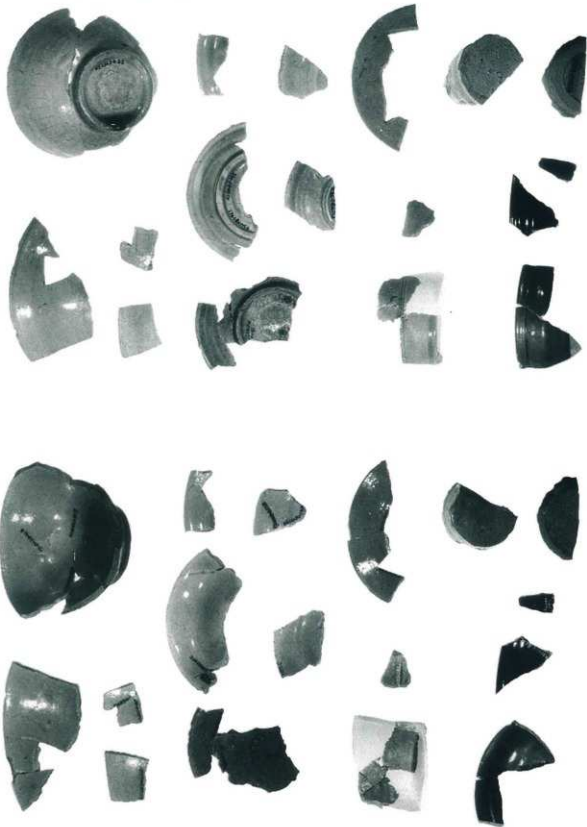
PL. 48 第10号地剖面 (南から)

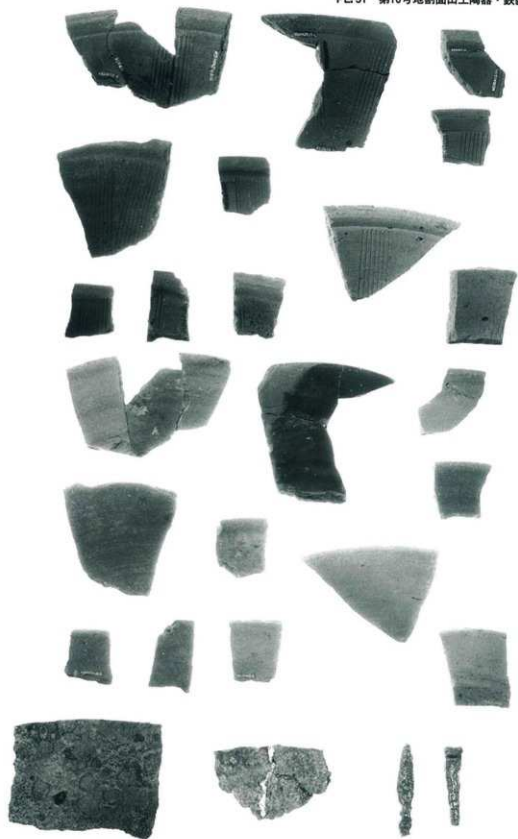


PL.49 第10号地剖面出土磁器（青磁、白磁、染付）



PL. 50 第10号地剖面出土陶器 (美濃、唐津)







沢治いの棚（溝・柱穴）
北より

南より





段・柱穴

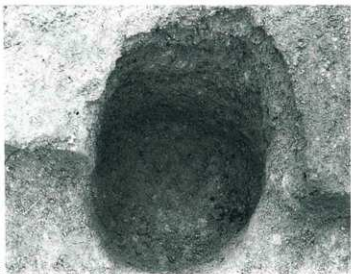


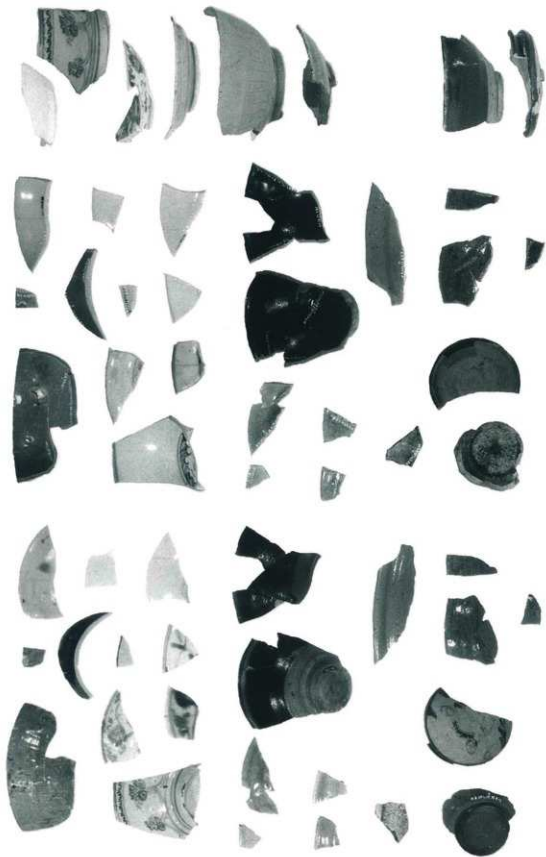
柱穴断面

柱穴断面



柱穴内炭化米







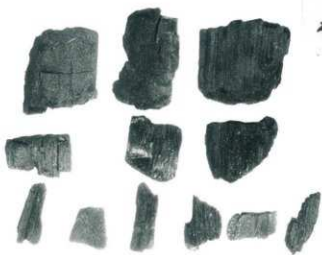
砂鉄?



磁着鱗片



鉄滓?



木炭



米

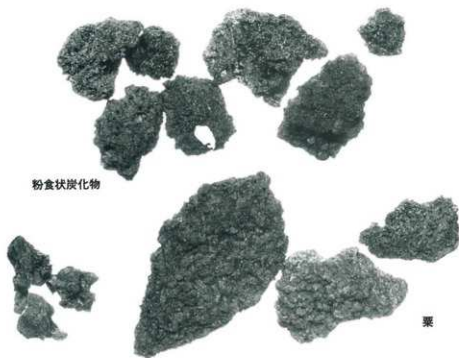


粟?



ソバ? 米

粉食状炭化物



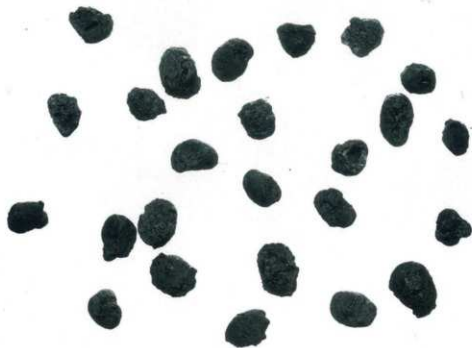
粟



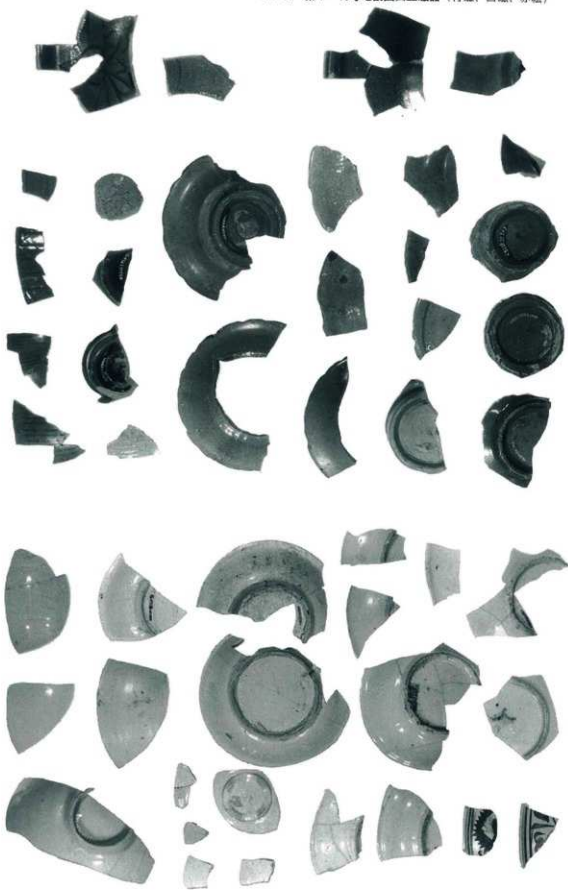
ソバ?



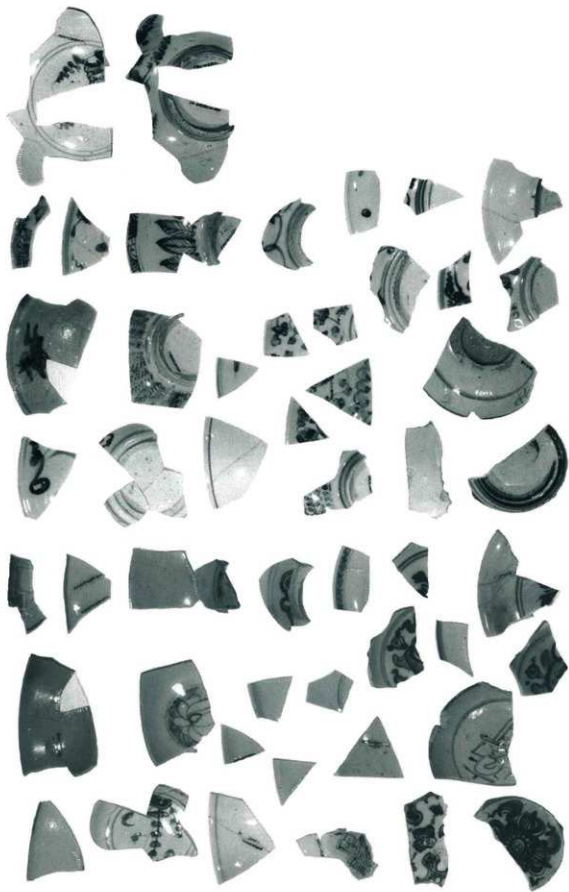
豆?



PL. 59 第1~10号地割面出土磁器 (青磁、白磁、赤絵)



PL. 60 第1~10号地剖面出土磁器 (染付)







唐津





史跡 上之国勝山館跡 VII

—昭和60年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会
北海道松山郡上ノ国町大留100

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月31日

印刷所 富士プリント株式会社

